歴とわ木

宇治巻　五

井を名とせり

[v. 49]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 49
copy 1
Asian
Japan
cage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

54

蓋亦二文の後より亦三文は四月まで書

そのころ藤つぼと男ゆりは、右大臣殿の女れに
なんおりしけり。まだ今上 無実と男丸させし時、人より
さきにまいり給ましかば、むつましう所ちれなり
るものはさひはことに抱し給めれど、さしてしと
ゆりふしもなくてとしへ給ふ。中(明石ノ)実には実たち
さへあまたこそらおとなび給めりに、さやうのことも
すくなくて、ただ女(故つぼノ)実一所(女二之)をぞもちなりゐへりける。
(故つぼん)けがいとくちおしう、人にとされたてまつりぬり
すくせなげしくおぼゆりかたりに、これこそやを
ぶまいりでし来のころもなぐさむばかりにて。
こなんとうしづきこそして給ことをろかなしず。

れうちもいとおかしくおもすれば、みどぐもらう
うさ物におもひきこえさせぬへり。女一宮を世に
さぶひなきさ度にもてかしづき罪えさせ給ふ。おほ
うこの世の光にそをよぶべうもあらぬ。うちくの
れなりさ度もおさくをとらず。ちくおさどのれいき
ほひいかめしかりしなどりいうくおとろへねば。
とくにこころもとなきことなどなくて。さつしふ
人ごのなりすぐるよりいじめらゆこなく時々に
つけつ。さくのへこのこそいまめかしくゆへく志
きさ度にもてなしぬへり。十四(女二)になり給ひし。
れもざをこそまつり給ひんとて。去よりうちりじ

めてごとくなくおぼしいそぎてなまごともなん
てなしぬさ夜まとおぼしまふくいましへよりつる
ちりたりけるこゝろもれども。これおりまこそいとさ
がし出つ。いうじくいとなる話に。女(右ツガ)れ夜ごろもれて
けよいづらひなて。いとちうなくうをなぬいふかひ
なく口おしきことをうへ(今上)にもおぼしなげく。こゝろ(右ツガノ)
ぢへなさけくしく。なつしき前おもしけるれ
うなれば。うへ人ども。こよなくさうぐしうなべき
けぎうなとおしミ男也。おほうなさうまじ北きハの
女(くりん)皮などまで思ひ男しぬいなし。宮(女二)ハましてけうき
れ心ちに。心ぼそうなしくおぼしいりたるを。こゝろ(今上ノ)

めして心ぐるしく衰(あはれ)にあげしめさるれバ此四十九
日ゆゑまゝに遊(しのび)てまつらせ(今上ハ女二を)なさせ給へり。因(今上ノ女二ハ)ごに
けさらせ給つゝえてまつらせ給。くろき(女二ノ)れぞ
やつれておもしすさ御いとゞらうしげにあてなる
かしき御さりなへり此心ざ御もいとよくおとなび
なて。母女御よりも。今すこしまゝやかに。をもりかな
ゑ氣色のまさりなへる後。うしろやすくハとゝて
まつらせなへど。まことに是此母方とても。うしろ
ことこれませなべきをぢなどやうのたゞしき
人もなし。けづかに大蔵(なつがノ兄才之)すりのかみなどいふを
女(な)御にもことゝなりことに世のあげしをもり

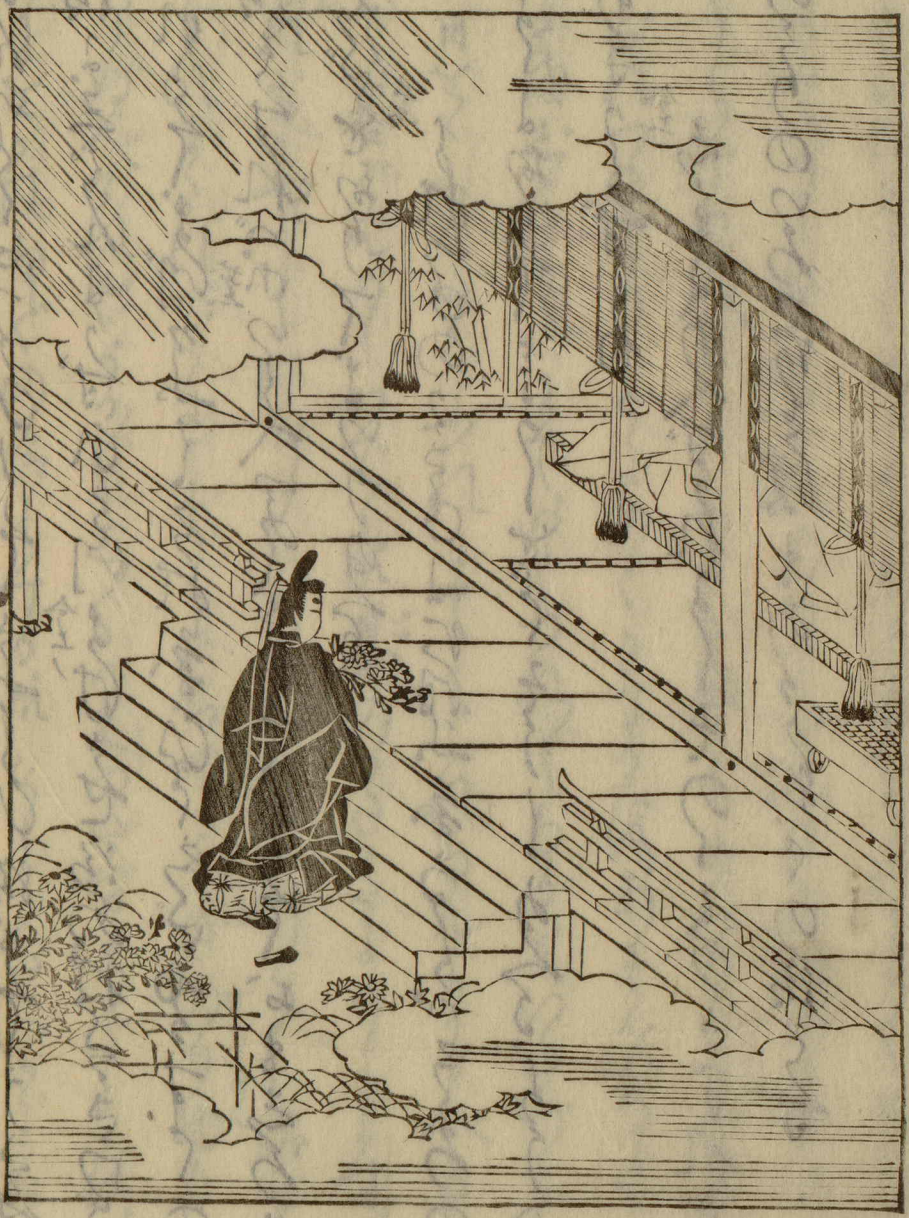
なまもあらず。やんごとなからぬ人ぐを。これもし人
にてもあれし給ふんも。女はこころぐるしきことおほ
かりぬべきことそいとおしかれなど。(今上ノ)れこころひとつ
なるやうにおぼしあつかふもやすからざりけり。
おまへの菓うけろひとてくさりなるころ。そらの
気色も衣にうち時雨なるにも。まづこれ(女三)れるに(今上ノ)つる
らせゐて。昔のことなどこまやかさせ給ふ。(女三ノ)れいらへ
などもおほとろなるもれからいとけなからずうち
笑しさせ給ふ。(今上ハ)うけ。くしく心笑しさせ給ふ。かやうなる
れさ夜をこしつまぬべからん人の。もてもやし笑ん
もなどかはあらざらん。(をさく)朱雀院の(女三)姫宮を。(源氏)六条院に

ゆづりさてし給しありのさぶめどもなど。おぼし
出るは。しぶしいでやあらずもあらんれ。さしでも（女三ノ事）
おりしなましとさしゆることぐも。なりしかど。
源中納言（芸）のひとよりことなるなりさ度まて。かゝ
よろげをうしろこゝてまつるまそ。それかこのれ
笑しおとろへぞやむごとなきさ度まていながら人
給めれ。さしずれれころよりほかなることぐも出
きてそれづら人はかろめられ給ことまやあらま
しなど。おぼしつゞけて。ともかくもれらんぞな
世まや。しさぶめましとおぼしよるはやがてその（女二を女三のことくなし）
ついでのまゝは。此中納言（芸）よりほかはよろしかな

べき人まゝなりけり。家たちのれかゝけるまさし
なるべきたんにおなまごともめざ後もしくはあらじを。
もとよりかもふ人もたりとて。さくにくきことなど
うちまずまじうゐる。あめりをつゐにはさやうの
ことなくてしもえあらじ。さらぬさきにさもや
ほのめしてましなど。おりくおぼしめしけり。
れ碁(ご)などうたせ(女三と)給。くれゆくまゝに。志ぐれおかしき
ほどに。菊の色も夕ばへしたる紙れんじて。人
めして。ただ(今上詞)いま夜ばかりにこれくらとさもを給に。
中づかさ(今上ノ内子ニ)のこゝ。かんづけ(系図ニ見ヘル)のこゝ。中納言(菫)みなもとの
あそんさつふとそうす。中納言(今上詞)のあそんこゝなる

まとおほきごとありて、蒸りおへり、げまかくさり
けきてめし出るもかひありて、とをくかほれる白ひ
よりもじめ、人まことなるさ面しおへり、今上詞 かしふ出ん
むぐれつゆよりことまのどかなる紙おそびなど
すき面ぜきかるまて、いとつれぐなるを、いるづら
ま日をくる、こゝろふれまても、これなんよろんべき
とて、蒸ぢんめしいでゝ、此碁のうちまめしよす。
蒸ん いづれもかやうまけぢくなるし、まけたし給ま
なるひまされば、さまこそをとせふまよ、今上詞 おきのり 女二ノ女ヘ 物を
ゆりぬべきれど、かゝぐむくいえけるすまじ、さ紙、
蒸ハ なまをかはなどの給をする、此かしきいかゞ

らんいとゞ心づかひしてさふらひ給さてうたせ
給ふ三ぢんにかぎひたり今上まけさせ給ぬ給ふさつぎ
かれとてまづ名ふもこれ茶ひとえぶゆうすとの
給ふすれば茶いらへ罪をさきでありておもしろさ
えぶとありてまいりあへり
茶よれつゝのうさゝにはほふ茶ちらがこころの
まゝにありてこまくをどくそうしあへるようい
あさからずこゝ
今上しもにあへずかれましそのくさくすれど
のうりのいろはけをぼもあるかれどの給ふ



（薬ん）うやうまありく目のめうさせ給れけしきを、人がそ
ちらずうけ給ちまがら、例の心のくせなれば、いそがし
くしもおほしず、いでや目いまもあらず、さ夜ぐま
いとおしき人ぐの（薬をしこませんとされもおこうすを云）れことぐもをも、よくきて通く
けさしへぬる紙、いまさらまひぎりやうのまれて世
まかへりいでん心ちすべきことくおもふも、かけも
あやしや、とさらに心をつくす人ぐまこそあるれ
とはしひながら、（女二ノ）姑がしまおもきば、しもとおぼゆる
心のうちぞ、おまりおほけなりけり、かくなこと紙
左大（タん）臣殿目の字なて、六の君はさりとも此君まこ
そはしぶくなりもまめやかまうしこゝらばつねまは

えいなびもそじとおぼしつるを。しひの目かなり
ことといでさぬべかなりと。ねたくおぼされけれど。
旬 其の家もたゝ。つぎとはあしほど。おりくは
つけて。六志ヘ旬ノ おりしさき南はさてゝ給ことこえざり
それがさぞれな紙ざりの此すきまはありとも。さり
べきまて此ころとまりやうもなどかなりしん。こゝげ
もりましうおもひさぶむとてもなをくしさ
きはまくぶんもたゝいと人けらくあかぬこゝち
すべしなどおぼしなりまたり。女ごうしろめて
けなり世の果まて。今上 こゝかどぶまむこまとめ給めり
世まましてこゝ人のさりすぎんもあいなし

なぞ。そ志ろとしげるのゐひて。中宮(ゆ石ノ)にもまめや。
なるうしろ戸給ことさびかきなりなれば。さこしめし(中宮ム)
まづらひて。いとおしく。(中宮詞句二の給こ)かくおしかくせひこころ
ざしてさしへゐひぬる氏。おやまくまのがれ。さこ
給ふんもなさけなさやうなるん。こゝこゝちハ此
うしろこゝろこそともかくもわなれ。うへの此世も
末まなりけとのこおぼしの給めるを。こゝへこそ
ひとかゝるさゞまりぬれば。まゝ心をつけんことも
かゝけなめれ。それざるかれ。おとゞの。いとまめざち
なぞしゝなるゝかなるゝうしやこなくもてなして
もれし給ふずやハあり。まして。これハせひをさて

きこゆりことも。かれもぐ。あまたこもさふらりんは
ちどりあらんなど。例ちらずことつぐけて。あるべ
しうきこしさせ給ふ。つが(白心)れころにも。もとより
もてくるれてもたる。おぼさぬことなれば。あかがち
まいちどてかは。ありまじきき海にも罕。さき給りん
さぐいとことうりもしげるりあさりは。こりもこめ
られて。こころやすくなしひゆへるなりき海の。家を
かんこと。伝ち海づるしくおぼすは。抱うきこちれど
げまこれ(タ)おとぐは。あまり思んぜられもてんもあい
なりしんなど。やうくおぼしよくりまこうなり
べし。あぐなりれこころなれば。かれ(あ)梅(ぜち)案の大納言の。(柏木ノ才ヘ)

さうぢいのれ（宣ノ姉）をもちをあげしさしず。茶口葉に
つけてものなひけるつゝ。いづれをもゆりしうし
あげされかり。されどそれせしはかりぬ。女二の家
もれぶくもてぬれば。いとゞちまごとよりはたらぐ
つま給いん。さもさてしいでだと（今上ノ）あげしめしさる
れかしさまちんと。つげさしゆり人ぐもあるは。
（慧心）あまりさしずがほちらんもひがくしう。なまめげ
ちりちどあげしをうして。さるべきさまりして
かしさぢゝさてし給ありくもあるは。（地）けしさるさ
やうはなどてかはあらん。それほどまあげしさごめ
さるりと。（慧心）つてまもさて。しげうれ氣色をもこれど。

こころのうちにはなほあるべすぐ語にしひ大とれ
なるしされ云ひすしろべき世なく見ゆればうしそ
くちぐりゆく抱し給けりひとれなどてかはさ
すがにうちくてはすぐるけんと心えがたくなもひ
出ろ口おしきしなくつまを。かれ有信にすうしも
おぼしさんん人を心もとまるもなんりし。昔ありけん
かうのけぶりに行けてぐる。今一たびこそまつる
もれにもがれとのこおぼして。やむごとなきうる
ぎ夜にいけしかたまどはいそぐこころもなし。右夕
のおほいとのにはいそぎこちて。八月ばかりにと
こそしめてぐり。二葉院のこいのれかゝ中にはこそ

ぬふま、されど、いかでかはなずらへめおりえ毎が
めれば、りなずず人へりうきこと出えん物ぞ
とは、なふくるしつる世ぞかし。おごそかすれころと
きくはるしきこえしもしげなくもひあるかし。めでた
ちかくてはこともりげなりことなし。あられたり
かるき猿そのことを給へる御代よもすまりれ給ふらん
ほど、いかばかりやすき心ちはすべかりけん。あへのたまう
らひなどのやうな、いそしもあなかりたくたなどは何
らずとらせ、いかりなやすげなきこともありけん。かの御
いとうき身なれば、つみは山ずこまり思ふべき
あきりなど、あはすまもやがておもてあなまし

よりハ山がけのまちむたんもひとつしへなりうし
ゑとも六八家のく給をさしことうがひてくさの
もとをかれにけりむらゝがるさ後たづしうもけら
くもむひむられ給こ大姫君のいとむどけなく抱もか
なきさ後にのこなるごとをもなげしの給しかど
こゝろのそこのづしやかなり所ハこゝまなくもおひし
けりれ中芸納言の君の今にはすらんこ世なく
なげきはこゝろ給めれど もし世にかもせましかば
又かやうになげすことハ有りやせまし それをいと
かういかぞさはあらじとむひいりなてとさ後
かうさ後にまてもなれんことをなげしてかうら

ちとくへてんとし給しぞかし。かくすずさうさ俊

までぞおもむきまし。かまむかまいりまをまりうず

ふれこゝろをきこえてちすしまし。ちすされんげどもよ。我どぢ

いかよこよちさきておもひけるとに給んとさに何

かうちるしとおぼをぼすまうまだうさひちすゝ。地かろ。

うつろしさとをもここそまうんとも。逃び申し

川ざきてものれぬ彦俊まて御給。家乃つるよりも 白

衰よちうしうおもさわしうしひちざう川く式

世のこちゝずおぼさこしとのこどしられぬとこし給 中ノ六ハまんこ

さうとこられさ身だくりより。倒ちすぬさ俊よちや

ましう志給しくもなりかうちゝこうまくるし

がりなどはし給ふ○ど。つねよりも抱まつること
いとゞなく。ふしてのこおもしする紙。まぶ（匂ノ）さやうなる
人のありさ夜など。よくもえしる給ひ○ば。ふ（白ム）ぐあ
つさ比なれば。かくおもしするなりとぞおぼしける。
さすがにあやしとおぼしとがめらることもありて。
もしいかなるぞ。さる人とてさやうにはなやむなれ
などのおふありもあれど。ゆ（中）ともづくしうしなて。
さりげなくのこもてなし給ひ。さしすぎさえて。世
人もなるれど。さしかにもえ志り給ふず。八月より
なりぬれば。ち（六志ノ事）日などほかよりぞつる人をて給。夏（白ム）ハ
へぞそんとにはあし○ど。ひひいでん程心ぐるしう

いとおしくおぼされて、さもの給はぬを、女（中ん）君はそれ
さへぞ心うくおぼし給。志のびたることにもあらず。
世中なべて志りたること紙。そのほどなどごまの給
はぬことく、いかでうしあしからざらん。うくつたり給
まし後も、とくなることなれば、うち（旬ノ）にまいり
ぬべてもよろとまることはことにし給はず。つくり
しこれはよがれなどもなかり川る紙。にはかり
いかに志給はんと、ころぐるしきまぎらはしり。
これば時ぐれ飯料とて、まいりなどし給川。
かくてよりなるけし罪し給ともこそつきたるに
のこそ志せられぬべき。中納（世ん）言飯も、いとくおしき

けぎかれとまて給ふ。菜ごろにおかすり交(句)なれば
衰とはおぼすとも。いまめしきうこにかなるべ
ばこころうけろひなんし。安(タ)がこもいとしたてかな
まれし給ひしりまて。ゆるひなくきてまいたし
給たに。月ごろもさもなしひ給たで。まつ夜おほく
あし給たんこそ。衰なるべ。かれなど。おもひよるま
つけても。おいなしや。我心にまるましにゆづりきてし
けん。芳の人(大)にころをしめてしのち。おほかたこ乃
世代もせひたるれて。すこたてこうしかこの心も
にごりそめしかば。こゝかれ此ことをのこときあり
ざ海にはせながら。さすがに人のころゆるされて

あらんことは、たゞめらりむしほいたまるべしと
たゞかりつく。たゞいかましてすこしもあられぬ心
されて。うちとけぬへらんかしきをもこんと。り
ささのあらましごとのこと心りぐかしは。人(大)そころ
ともあらずもてなして。さすがり一つこましも
えさしたるつまじう。心ぬへなちぐさあは。おちまじ
ぞといひなして。ほいなるぬかたまおもむけ給
しが。ひとくうしめしかりしかば。まづこれこころを
きてをたがへんとて。いそぎ(旬へ中を)をしつぎぞうしなど。
あるがちはめくしうもれぐるとしくおそ。なりき
さぐらきそしほど。心いげるもいとかしから

ざりけるころかなまと。思ひぞくやしさ。白 家もさつ
ともそれほどのなりさ海も出給ひ。ひがきうん所を
もすてしはそぐり給ひじやとしかる。いでや今はその
ありのことなど。かけてもの給いでざめるし。お給
あるなるにすこうつりやするひとも。女乃
ゑめのこまもあらず。それもしげるく。うぐしさ
こともなりぬべきなめりしなど。よくしも聞かし給
ひがまとまあまり一ゑまし。こゝろころなか
らひま。人はいとこゝろなくもどうしくこゆるなり
べし。それ人 大 をせるしうこゝてまつりなしてしな
しふまは。こゝどのゆむすめ 女二 を給ちんと。おぼしとさ

つるもうれしくもあらず。これ中君をえましかばと
おぼゆる心の。月日にそへてまさるも。こゝかれ
ゆゑりとしふに。むさるれがこ紀ぞうし。たらからと
いふ中にも。かぎりなくむかしのへりし物語。
今(大ノ)はとなり給ましかてにも。とまらん(中ノ事)人とおもゞ
ことゝおもへとて。よろづはむさずなることもなし。
こゝかれおもひをきてしさ夜を。こゝへのへるのこ
なん。くちおしうまらめしきふしまて。これ世には
のこりぬべきとの給しもれ紙。おまかそりても
かやうなるまつけてはいとゞつくしとやこ給ら
んなど。つくぐと人やまもらぬひさりねし給

まれくはこゝろうき月のさとにもあれこそありけん
こしかたもさこそ人のうへ人今はちかきあたり世
せちにめでし給ふおもげのみすさるを抱きとりひ
かれげなくつゆあらし給へるの中にはべとの
づからくみずあはさるゝもあらぬべきわれ浮こ
とまはこゝろさきかたもあるさこそさはやかなれ
さうかふ(宇治ノ姫君ヲ云)君ぞちのはざるをとらむもうじぞさるゝの
人ぞもとらえ世にまさぐひつてかたへみて心ばへげ
あまつすまおすゝみそぞとつぞ母をうけつあしそせな
ぞひとかなはれど今のは世をなじさきもあれん
とさきがは人をきとみえて心とまつりはべしまゐる

ぢりのことはなくて。なしてんとしふころづひ
かくなしをいでさもわろく。我ころなぐらはぢけ
てもあるかなくどつゐよりもやがてまどろまず。
あかしぬへるあしたは。雪のまがさより。菊の夕く
おもしろくしつゐる中は。おさがれのちれげは
てまじつまたる紙。程ことはめとあるこちし給。
おんなまさきてとゝつゐなさ世にもちすしかが。
ころぐるしさるめりしかうしもあげながら。
いとかりそめようちふしつゝあかしぬへだ。此菊志
ひらくる程もこゝひとりのみぞ給ける。人めして。
小の院にまいらんにとくしかしぬ車さし

出させよとの給へば、白やは唯日よりうちまゐん
かりしまゐるよべは車ゐてかへり侍ようさと
中さぐれかれ蓋のれ中のなやこ給ふ。とふ
らひこそしん。けふはうちまいるべき日なれば日
さけぬさきにとのゐて。れさうぞくし給。いで給
まゐよ。おりて菜の中にまじりもゐるれさ殿も。
こしさらにえんどう色めさてもくてなし給ひ
どおやさうぞうちこそにお殿めしうそづかしげ
にて。いうじうなしさぐつ色これこどもにおずふ
べくもあらず。とのげうしおかしうぞこそし給けり。
給がれとひさよをゐるに。つゐいさうこげる

蓋 けさのまれ色にやめでんをく家のきてぬに
かゝる菊とこゝろく。たゞれなどひとりごちて。おり
ても給へり。をこれへしをばこすぎてぞいで給ぬ。
明たちなるまくに。さりこちこぞなく色おしさ
に。如どちは蓋ん どけるくあさいしぬへらんかし。うう
しいまどなどうちたてき。こはづくらんこそうぬく
しかるべかれ。給まぐさ。まぐさあまかりとせな
ぐ。人めして。中門のあさたるよりこせぬへぞ。
こゝろしどもこれ。ありて給べし。如なのけひ
などし給りつとゆきば。おりてきりのまぎれに
さ風よくあゆこいりぬへる後。宴(匂)の悪びたるところ

ちりかへりぬへるまやとこうる（内ノ今）。つゐにうち志めり
ぬへるなり。例のいとさ夜ことに匂ひくれば。ち紙
めざ夜しうおもすらし。心をあまりおさめ給屋
とそにくくなれなどあひなくつらき人ごなどは罵
あへり。おどろきがほにもあらず。よき程に打そる
めさて。此志と口さし出るぞすらさ夜もいとめやすし。
これ（蕉詞）にさふらへとゆるさせ給ほどは人ごしさ心ち
すれどち紙からうしすれまへにさしもなるさせ給
へるうれしさまなん。志ぞくもえさふらはぬと
のゆへば。さしらばいかゞは仰べからんと。さらしも。さる（地）
おもてなどやうのかくれぞうし。うらふ（蕉詞）ふらびと

おもてなどやうのかれぞうしうらふふかひと

などのさふらはんまことたりなるやすこどころは
それもまゝ為ぐれ心なれば うれへさしもべさるも
侍らずとてなげしまをしかりてなかすれば例の
人ぞ行あしこもとまなどそぞのし男也 芸ノ とより
けしひもやまかまおくしくなどは抱し給らぬ
人がしなる紙いかくしあやかまもてなしおさめ
えれば 中ノ いまはこづからさして給ことも やうく
うたてつましかりしかゝすつしづうすらざて
おもなれ給ふり 芸行 なやましうおぼさるらんさ海も
いかるればなどさひ男もあへど 中 ちかぐしくも
れいしへさして給ふず 芸ん つ○よりもしあり給へ弟

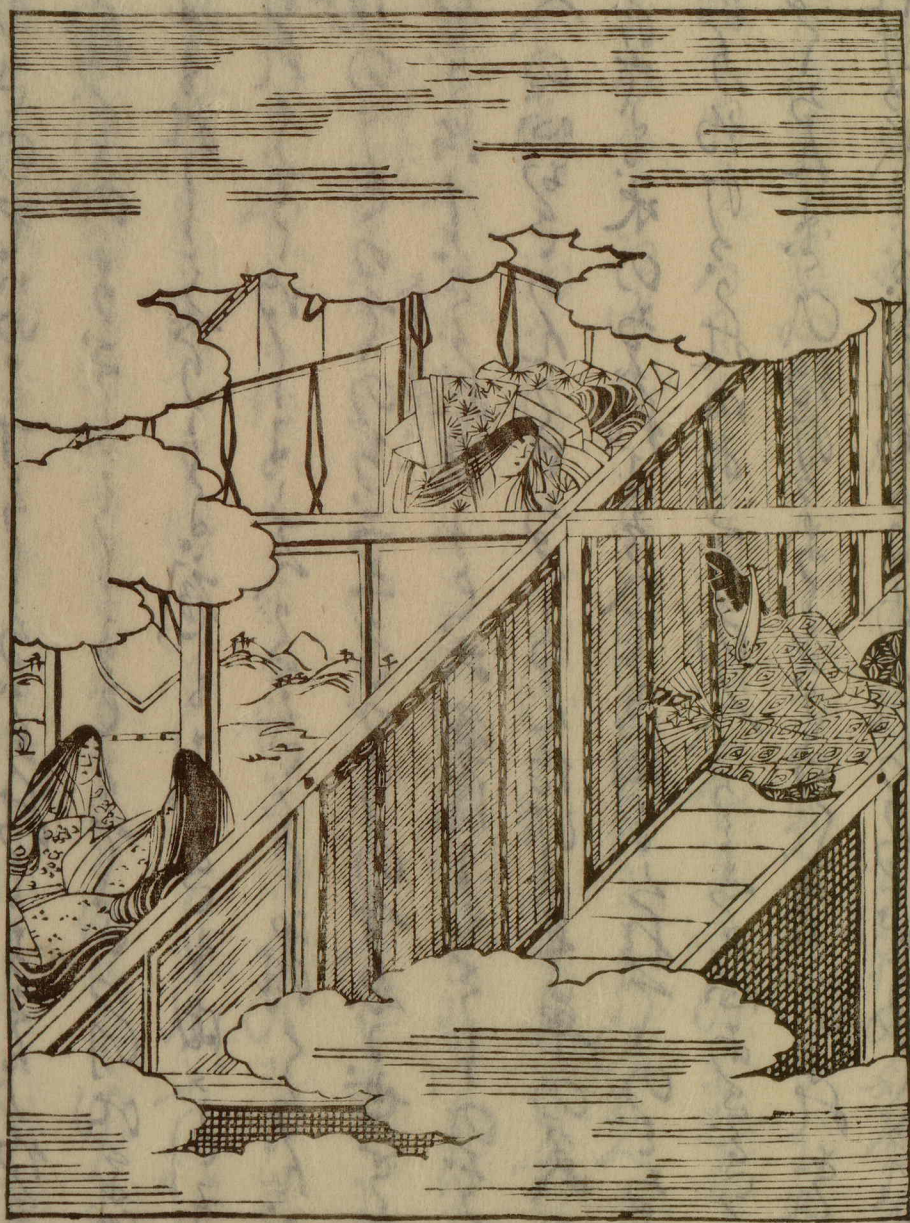
なしされ心ぐるしくも哀にをしとうられなて
こ夜やうに世中のあるべきやうなどをいしうら
やうのもれてあしましやうにをしへなぐさめ寄て
給声などもつぎとにゆへりともおぼしざりし
かどにあやしさまでこそそれとのこおぼゆるに
ひとめこぐるしうまどうにすぐれもひきかけて
きしむかひさてまほしくうちなやこのへらん
うちゆしう見て給もなぞ世中に抱しさぬひ
ともえあるまじきわざにやあらんとぞ思しられ
給人(詞)ぐしくさしくしさるにはなしずとも
こころにおもふことありなげしく身をもらく

こころにおもふことありなげしく身をもらく

なやむさ夜になどはなくて、をしのべきこれ世と、
ミづからせひぬへし我心からかなしきことをもおこ
がましくなしやせさ柄おもひをもかるくなやせ
からずせひ行ることそいとあいなきれつき位などし
いひて大事にすめることなりのうれへにつけて、
なげきせふ人よりもこれやいますうしつミれふさ
もまさるもんなどいひつゝおりさ夜へるもなる我、
あふぎにうちをさてこゝねぬへるがやうくあるこ
もてゆくもなかく気のあそひおしうミゆれど、
やをしらさしいれて

[illegible]よそへてもこゝろべかりなりせし霧のちぎりゝ

をさし物がほの茶ことさしびてしをもて
ちきぬる露をおとさでもとまへりけるよとおう
しくこゆるをさちるがうるく氣色なれば
中 さしぬまゝかれぬる茶のもうちきをくる
つゆいちはぞまされるなくかれるといとしれ
ひてこともつゞけず。けくましげるいひけちぬる
ほどちはいとよくまゐるかれとしふまを。由
げぞうるしさ



荒村
あきの里はいますうしながめれこまきり侍る。
つれぐのまぎらはしにもとて。さいけ比字治
にまれしとぐりしに。庵もまがきも由ことゝ
あれはてゝ侍しに。こへがたきことあほくなん。こ
源院のうきゆてのち。二三年がりのすゑに世をそ
むき給し。さが院（大覚寺をさく）にも。六条院にもさしのぞく
人の心おきめんかたなくなん侍けり。其単の文に
つけても。水のながれにそへても。涙にくれてのこなん
かたり侍けり。かれ此あたりの人はかゝしも心あきさ人
なくなんまどひ侍けりまくにかたぐつどひまれきら
れけり人にも。これ所ぞにあがれちりつゝ。どのく忘れも

ちかくすまおきし給めりしはいはけなき程の御有さま
どうしまして心おさめんくにちかく覚しけるまゝに御
おぼしぬることまきせりけく山ふみしはじめまゐり
すゞろなる御中人はありなど秋はまどひおはへる
こそあはく侍されさてなほそれあしきて
忘草おふとてはちんこれ庄のおゆく（夕）もつらり
すゝ（吹花中宮）ぶちなどしもろくもれしぬへども
くりかへや侍るめれるかまさくれひなさき
なかしさこそ給へしほどのともさし月かれば
ものさ侍りありの出くまこそうとく侍るなげるは
まゐりあるやうさかなりちんこそ侍しうくもし

きこえしさせなどらも。これ(源ノ)いましへのかなしさは
まぶいたけなく侍けるほどまて。いとさしもしまぬ
まや侍けん。行これちりき夏(大ノ)こそさますべきかな
なくさひのへらくはおなじごと。世のつゐなき
なしひなれど。つゝみかきかるはまさりて侍か
まやと。それさへなん心うく侍とて。ないのへるさ夜。い
と心ふかげなり。むかしの人(地)をいとしもおもひ出て
ざらん人ごは。これ人(業)のしのへるはかしこき代こん
まは。すぐろまたぐまもあるまじき代。まいて(中心)我も
物を心ぼそくおもひこゞれ給まつけてそ。いとゞ
つねよりもおもげに思しくかなしくしこそ

給心なれば今すこしまゝほされて抱もえきえし給
まずさあしひかゝるまゝへるけちひをかくこゝまいと
衰とおもひかくし給世のうきよりはなぐひとも
いひしをもさやうにしひくらづつころもことに
なくて、そしごろをすぐし給しを、いまなん程いかで
しげかるらさ夜にても過さ夜ほしくしなゝかを、
さすがに心にもかれはざめれば、年のあまこそうら
やましく給れ、これ廿日(八ノ忌日を云ヒ)ばかりのほどはかれちかき
寺の(ね)鐘のこゑもきくけるさ夜ほしくおぼし給ふ
思びてけるさせ給てんやと思ひさせざやとなん、さ
給けるとのゝへば、(其詞)あらさじとおもほすとも、いかで

かはらやすきとのこぶるまでとゆきての程ぞあら
ましこと山ざさる御れバおもひつてあん内日まん
ぐつと御故家の北この日ハ死おぎりまさるべき
ことゞもこれいひきさ御みきうしさハ我さうとき
かるおぼしゆづりてよ時ぞこのかつまつけてとき
ころまどひのくしきめもあいちさまづきうしおま
さ御まあし御りあげやとあん忠御る氏まつくいうぐ
おぼしさきうん。ともかくもさぐめさせ給ひんま
さつくひそこそてあん。おつべかりんやうま
の給ひよまうしおまなどくもうとうしずうけ給ハ
らんのこゝそ御いかなまでハ御しめあんとぞまめ

ぐちゝろことぐもをきゝて給。經佛などこのうへ（中ん）
もろやうじのべきなるゝ。うやうなるつゐでにこと
つけて。やをしてもりねなぞやとおもむけのへる
をしきなれば。いと（蓋句）あるまじきことなり。れなるまぐ
も心のどうををぼしなせなぐ。をしへ罪て給。日さし
あがりて。人ぐ来りあつまりなどすれば。何（蓋ん）まりなが
ねもことありがれなるんまより。いで給なんとて。
いづこまてもうすれとまはなるひ給はれば。はし（句）
さなるさ心ち志給てなん。いま又かやうまもさふら
ちんとてこちなぬ。家（旬）のなど（蓋ん）なるさありまいさけ
らんと。さひのひぬべきれ心なるもいづらりしくて。

さふらひのべさうなる右京のかみめしてよべまゐで
させ給ぬと承(うけ海)とりてまいりけるをおもしし海さ
ぬほどなりかれがくちおしき後うちにやまいる
べきとのゐへだ(右京詞)ゆふはまゐでさせたまひなんと
申きば(薫詞)さらばタつかもとて出ぬ(ん)ぢ後これ(中)
れけるひかりさ海をさく給ふびどよおどて芳の
人(大)の中心をさてをもてゐへて志ひぐまなり
けんとくゆる心のこまさりゆけば(薫ノ地)ちぞや人やを
ちらぬ心ならんとおもひかへし給そのまゐくり
いまぐ(大宮殿之)さうじ(精金之)にて(ゆくぐ)をこちひをのこし給
けるおしらし給ふ(女三)宮をちぬいとけく

ぶちうちうちぶもをきえて給。經佛などこのうへ（中ん）
もろやうじのべきなめり。かやうなるついでにこと
つけて。やをしてもりねなぞやと。おもむけのへる
をしきなれば。いと（蓋句）あるまじきことなり。れなまぐ
も心のどうをおぼしなせなど。をしへ写て給。日さし
あがりて。人ぐ来りあつまりなどすれば。何（蓋ん）まりなが
ねもしとありがれなんまより。いで給なんとて。
いづこにてもうすれとにはなしひ給はれば。はし（句）
となき心ちも侍てなん。いま又かやうにもさふら
ちんとてこちなぬ。安（句）のなど（蓋ん）なきありにいきけ
らんと。せひのひぬべきれ心なりもいづらしくて。

さふらひのべさうなる右京のをめしてよべ（蕙詞 白ノ）まゐで
させ給ぬと承（うけ海）たりてまいりけるとおもしし海さ
ぬほどなりかれがくちおしき紙うちまやまいる
べきとのゐへだ（右京詞）かふはまゐでさせたまひなんと
申さば（蕙詞）さらばタつるもとて出ぬ（ん）ぢ紙（中）これ
れけるひなりさ海をさき給ふびごとにおどて芳の
人（大）の中心をさてをもてうづへて出ひぐまちなり
けんとくゆる心のこまさりゆけばらぞや人やき
ちらぬ心ちらんとおもひかへし給そのまゝにり（蕙ノ地）
いまぐさう（大宮殿之）じまていとぐをこちひをのこし給（精金之）
けるあらしらし給ふ女（女三）をもちぬいとけく

ぐちこうことぐもをきこえて給。鐘佛などこのうへ（中ん）
もくやうじのべきなめり。かやうなるついでまこと
つけて。やをしてもりぬなどやと。おもむけのへる
くしきなれば。いと（蓋詞）あるまじきことなり。れなまぐ
も心のどうをおぼしなせなど。をしへ罵て給。日さし
あがりて。人ぐ来りあつまりなどすれば。何（蓋ん）まりかが
ねもことありがれなんまより。いで給なんとて。
いづこまでもこすれとまはなしひ給ひねば。はし
さなき心ち志給てなん。いま又かやうまもさつ
ちんとてこちなぬ。宴（旬）のなど（蓋ん）なるきありまいきけ
らんと。ちひのひぬべきれ心なるもいづらしくて。

さふらひのべさうなる右京のをめして、よべ（薫詞）まゐで
させ給ぬと承（うけ海）たりてまゐりけるをおもし海さ
ぬほどなりかれがくちおしき代うちまやまゐ
べきとのゐへだ、かふ（右京詞）はまゐでさせたまひなんと
申さば、さらば（薫詞）夕つゐもとて出ぬ、ぢ（ん）代これ（中）
れけるひかりさ海をさく給ふびどくにおどて芳の
人（大）の中心をさてをもてうゐへて、ちひぐまなり
けんと、くゆる心のこまさりゆけば、ちぞや人やを
ちらぬ心ならんとおもひかへし給、そのまゐり（薫ノ地）
いまぐさうじまて（大宮殿之）いとぐをこちひをのこし給
けり、おしらし給、ちゝ女（女三）をもちる代いとつく

おほどさて。抱しどけなきれころもを。女三ん うく子れ 葉ノ
氣色をいとあやうくゆくしとおぼしていく世しも 女三ノ
もおしじをこえてまつらん程はかひあるさ海まて
こしなへ世中をしひすて給ひしをもうくる身なり
てもさ海とげきしなべきまもおしぬをこれ世
まていふかひなきこゝちすべき心まどひまいとゞ
つゝやうらんとのなふがおしじけなくいとおし
くてよろづをしひけちつゝおまへまてもしひ
なきさ海をつくり給。左のおほい夕夜まハ六条院の東
藤葉家住給西
のおとゞをこがきしけしひてかざりなくよろづを
とくのへて。まち白と笑し給ふ。十六日の月やうくさし

あがるまで心もとなかれば、いとしも（タム）れ心（白ノ）にいとぬ
ことにていかなるんとやすらずおぼして、あな
いしのへばこれゆふつゝうちよりいでゐて、二条
院になんおりしますなるとひと申おぼす人もゐ
れば心やましかれどこゝよひすぎんも人口へ
ちらべかれば、れ子の仏中ねしてきこしめへり
おぼ（タ）ぞらの月ぞにやどろひが程にまつらひ
すぎてこしぬ君に、家（白ム）は中々今なども（中二）こしじ。
心ぐるしとおぼしてうちにおりしける後、れ（白ノ中ヘ）ふこ
きこしめへりける、れ（中ノ）也やいかゞありけんなをいと
あはれにおぼされかれば、志のびていたりめへりける

なりらうさげなる有さ海をうすてくいげべき
こちもとず。いとおしかれば。よろげよちぎりけ
かぐさめかるて。もろともに月をながめておりする
ほどなりかり。女（中ん）君は日ごろもよろげにおもふこと
おほかれど。いかで氣色にいざさじと。よろげに
相心で色しつ。つれなきさ海し給ことなれば。
ことにさくもとがめぬさ海に。おほとうにもてな
しておもすさ海いと衣なり。中ね（夕子息）の乗り給
へる夜さくぬて。さすがにかれもいとくおしかれば。
出給ちんとて。いま（詞）いとくく海いりこん。ひとり月か
ミ給そよ。心そらなれがいとくるしと笑をさのて。

ある夜つく〴〵と思へばくれのとよりゐん殿へつゝ
思ひ給はれうしろでとことゞもくも見えしかど
さぶらふ人々のうちさめぐさしきのそれば心うき袖も
人の心なりけりと我ながらしこしものうきことを思へど
よりころはそく哀なる男どもまで世中とらひ
うちめくりさ夜までもおとせざりし一所をこそ
こしらへてさう山里に年へしかどさばいかにと
あくつれ〴〵なるすぢはあるまじくいとゞ心の
あらそて世をうしとも思ひこざりしをなりまよふ
づさいあさましきれつゞ世の猶にも世をそ又
ときまりてくる時すべくも見えずあはれとは思ひ

とのさぐひあらじとおもひしを。命ながくて
いまでもながらふれば。ひとれせひたりし時どより
し。ひとりずまもなるやうなる有様を。なるがうべさ
とくもせしるど。こうかぶりはまくげなきれ心
だへもてなしなるよ。やうくせふとうすらぎ
てありへつる代。これありふしの身のうさはこと
へんなくかぶりとおぼゆりつぎなりかり。ひと
すらせまなくなり給ましへどよりも。さりとも
これは時どもなどかはともせふべき代。こよひかく
ふすてて出給つらさよ。さしかたりさ記これかさ
ふぶり心ぼそくいうじ。ほが。つが心ながら。なひやる

るなく心うくも有かれ。をのづからたまづらへだ
など。ちぐさあんことをしつゝ。さしまをばすて山の
月のこすゑのぼりて。夜ふくるまゝよろづしひ
こゞれ給。松風の吹くる紙ともあらましかりし山
おろしにおもひくらぶれば。いとのどかなるけ
しうめやすきれすまゐるれど。こよひはさも
おぼしず。しゐの葉のととまはをとりておぼゆ
山(中)里のまつのげにもかくぞかり身なし
ひあきの風はなかりき

中ん
こうしかるはいつまれまけるまやあらんおいぐべども
なまじ老人討いはせ給ね聞こうはいこそべるまれ
をおさましうとられこされらぶもれをぶる
ゆらんじいれ○がいかるなるらせ給ふんおれ見
ぐるしやゆくしうせひ出らるしことも仰せいと
こそいりなられとうちなげきて いでや此れ事
よさりともかくてをろかまはよりもなりとて給ひし
さいへどもとの心ざしふうせひそめつる中ハ若
紫なるらぬ物ぞなどいひあへるも中ん地ぐまさくま
くて今はいかるもくかけていたぞらなん こゝ可
こそこゝめとおぼさるらはへまはいたまじ我ひとり

恨(うらミ)ぬんとまやあらん。いでや中(芸)納言殿のさばかり
衰なるれころかゝる後など。そのかゝの人ぐにいひ
おもきて。人のれすくをれあやしかりけること
よといひあへり。家(白ん)にいと心ぐるしうおぼしなげ。
色めしきれ心を。いかでめでたきさ後ま。まち
ちきれんと心げさうしてえなりずたきしめ。ゆへ
れけるひいんかたなし。まちつけ(六家院)ゆへるところの
有様も。いとおしかりけり。人(六宅)のれほどさぐやかな。
あへかなまどはあらで。よきほどなるあひたる
心ちしゆへる後。いかなるんね。こしくあざやぎて。
心ぢへもたをやかなるかたにあるく。それほうりかな

などやあらん。さあらんにそうしてあるべ。それなど
おぼせど。さやうなるれけくひにはあらぬにや。れ心
ざしとろかるべうもおぼされざりけり。秋さ夜
なれどふけましかばにや。程もなくあけぬ。かへり給
てもさいへはふともえけたり給ひず。志げしおぼされ
ごもりて。おきてぞれ文かき給。れ々しきけしうは
あらぬなめりと。おまへなる人ぞつきしろふ。中さい
のれかるこそ心ぐるしけれ。天下(あめのしたさ)りあまるされ
心なりともとのづからけをさるくこともありなん
りしなどこぐましもあらずゝなくれつうまつり
さるべきなれば。やすらぎうちいふことにもなりて。

まべて我ゆるげるるつきまぞありける。れ(六ヵ)りも
(旬ノ方ニ云ヘ)こゝるまてこそはとおぼせど。よれほどのおぼつる
なさも。つねのへぞてよりはいかゞと心ぐるしそれば。
いそぎ(中ん)つゝり給。ねくこれのれうち。いとめでたく
ゝ前ありていり給へるるに。ふし(中ん)ころもうえてあれば。
すこしおきあがりておとするに。うちあるゝおへる
ほのまゝひるど。けさしもことにおしげさ面
さるまてこしおへば。あ(旬ん)いるく泪ぐまれて。しどし
うち風もり罪しお紙。だづ(中ん)しくおぼしてうちこつ
がしおへる。かこれかるまんざしるど。我いとあり
がたげるり。(旬)おもな面りしこるさま。こ面やかるる

しかればやゝもえのひ出給ぬ。おもむくしまや。
なまぐちのこゝろやましげなるれ気色なるん。あつき給
のまくらの給しりしじいけしつとすぐしさほど
給出ろもうほどそれぐしりしぬいこゝらしさ
わざられ。さぬぐくはきさすらこともあやしうた
ふしるすさ心ちのこゝそすれ。さはおもたずほうに
まろのべてこそいようしめ。ともしおくん僧もたれ
あまぐし僧都をそでよびはさふりすべりけむ
るどもや。うなす。まめくしとの給へじ。かうらくすも
こよろさに心づきなくかぼしみへどもじけはいしん
まくしざらしもうそあれば。むしもあやまち

ひとゝなくぬ宿之庵まで。かやうのありは行しかど。との
げかしいとよくをとこゝろ地をとの給へば。いとかく（句讨）
こそさはやかなれとうちつゝひて。なつかしうあい
げつきこゝろなるも。これまなしぶ人はあらじかし
とせひながら。地（地）又さくゆかしきうるの心いられ
のこちそひなへるは此心ざしのをろかなるぬなめり
し。されど（中心）こゝろふ程はかたるけぢめもなきまや。
後の世までとちかひこれめ給ことぞのつきさぬと
きくまつけても。げまこれ世はいとこゝじかくめる。食
まりまをひしきは此心はこゝぬべかれば後のちぎり
やこがたぬこともあらんとせふまこそ。れこりずまる

まことも云れまれぬべかれとて、いとゞうねんずべか
めれど、元恵びあへぬまやかふはなき給ぬ、日比を
いかでくせひかりとこしなしじと、よろづにおもひ
まぎらはしつる氏、さ海ぐりおもひあり、まる
ことしおほかれば、されこも元もてかくされぬまや、
こぼれそめていとこまを元こめしひ給はぬを、いと
たづしくまびしとせひて、いたくそむきぬへぞ、
白ノ
志ぬてひきむけ給つ、詞こゝしゆるまくに衣なるれ
なりさ海とこつる氏、程へぞてこゝろれ心こそもれし
ぬひかれなさしずは東の御どにおぼしかりにこゝろ
こそて、ワガれ袖をて泪をのごひぬへば、中詞東のまの心

がちりこそ。の給はけけてとしたりしれ仍ぬれ
とて。すこし御くしきぬ。げ（白詞）はあが君やおさなれ物
いひや。されどまことは心よく後のなれだいと
ころやすし。いうじうことちりしてきゝ也とも。
いとしるるべきけざぞ。むげは世のことちりを
しり給ちぬこそ。らうしたき抱かしけりなれ。よし
けがれ男になりてもしめぐしゝ人。男を心とも
きぬ貧積なりかし。もしおもふやうなる世もあらば
人にまさりける心ざしの御どもしらせなるべき。
一ふしなんあるこゝやすくこといげべきことにも
あしねば。命のこそなどの給程にかしこはなり

ぬへるれ使(つひ)いといたうゑひすぎまされば、すこしいで
うるべきことも忘(しれ)て、けぎやうまこれこれこおもてま
まれり。おまれうるめづらしげなる玉もまかげき
うげもれうる後、さるありと人ぐこうい(地)川の後どま
いそぎうき給つらんとこうも、やすらずそあり
けんかし。家(白ん)もあるがちまけしむべきまはあらねど、
さしぐこはる後いとおしき後、すこし(使ノ)のよういも
あれかしとる後ゐるいらいるれど、いまそかひ
なかれば、如原志てれ文とりいれさせぬふ。おなじ
くはへぐそなきさ後まもてなしもそくむと思し
てひきあけぬへるま。まく(茂兼)母の家のれてちありと

まゐれば、いますこしころやすくて、けとさぬへり。
（文ノ詞）をむじがさまてもうしろめたのわざや。さうしらは
うたもらいたさまそくのしゆれど、いとなやまし
げまてなん
（後案）をこれへしきほれぞまさるあさ家のいかま
ときけり名称ちるらん。あてやかまおかしうかさ
ぬへり。（句ハ）かどとがましげなるもわづらりしや。まことは心
やすくてしばしはあらんとおもふ世とおもひのほか
まもあるかれどはの給へど。（地）まるかたりとなくて
さあるべき抱まなもひならひたる。さて人の中にそ
かやうなることのうらめしされども。こゝろひとくらい

しくはあれ。せんぞこれをいとかうし。つゐまかる
べきれことなり。文こちとさこゆる中なりを。
すぢことは世人ちきそしこれば。いくこりもくえ
語らんことを。もどきあるまじそれば。人もしれ(中)るを
いとおしなどおもひこゝぬるべし。(中を)かぞかり
もれくしくかしづきすへまて。心ぐるしきかる
とろかるしぎおぼしこるをぞ。さいをいおりしける
といふゆる。(中心)こづるの心まを。おまりまなるりし
まて。まはかまちしこなるべきが。なげかしき
なめり。うるすぢをいかるれば。おさかしぎ人のせふ
らんと。其物語などをこるまを。ひとれうへなど

まてもおやしきくせひしいげまをろかなか
まじきつぎなりかりと。つぐ身になしてぞ。何ごとも
せひしられ給けり。実(白)はつゐよりも衰ようちとけて
なさ後にまてなしまて。心(詞)げにまれまつらざなり
よて。いとあしそれなどのまひて。よしあるれんざまれ
めしよせ。まるさるべきへめして。ことさらにてう
ぞさせ給などしつ。そぐのしきてしまへど。いと(中山)
くるるのをおぼしたれば。ミ(白山)ぐるしきつぎれと
なげき罪し給に。それぬれば夕つるしん愛へつる
まぬぬ。風(地)すぐしくおほゆるの里おかしきれ
なるに。いまめしきにすてをへるれ心なれど。

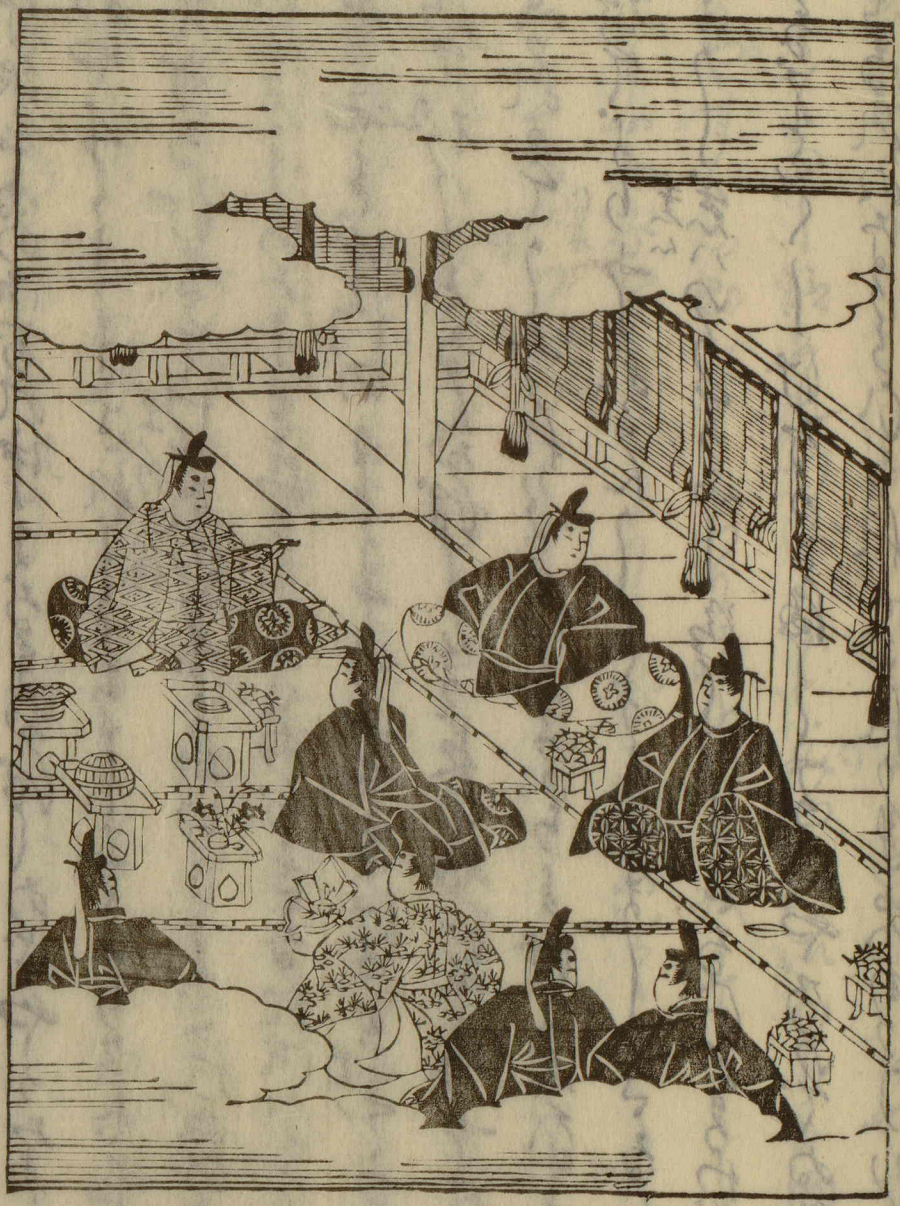
いとゞしくえんなるは。抱(中ん)せらしき人のれこころ
のうちはよろづまさのびがてきことのこぞおほかり
けり。ひぐらしのなく声まも。山(宇治ノ事)のかげのこゑしくて
おほかるまさりまし抱をひぐらし乃こゑ
うらめしき秋のくれかれ。こよひ(句六君へ)はまだふけぬま
いぞ語なり。れさきのこゑのとをくなるまくは。
おま(中ん)もつりすりがりまなるも。我ながらにくきこゑ
れと。おもふくきてふしゐへり。つじめより抱後
おもちを語し宵さ夜なぐを。おもひ出るもうと
ましきまでおもほゆ。これなやまし(くはいまんノ事)きこともいか
ならんとすらん。いとゞしいのちこゞうきぞうなれば。

やうなるんついでにもや。そうなく如なんと
すらんなど。ちふにはおしかしひどうなしうもあり。
又いとつこふうもあるる抱をなど。海どろまれ
ぬまくにおもひあるし給。その日は（如石中宍）さいの家なや
ましげにおちしますとて。これもくまいりけ
どひこまへれど。いたくなるれかぜひりおかし
ましかれば。こくなることもおちしまさずとて。
（夕）おとゞはひるまうで給にけり。（芸）中納言の恵さそひ
きこしめて。ひとけれ車にてぞ（夕へ）まうで給にけり。
こよひのざしきいかならんきよらをつくさんと
おぼすべかめれど。（地）かざりあらんかし。これ（芸）きこも心

もづし されど。もとこもとさきの見て。はつかめる
ざ夜にまゐさるべき人もおもきず。地のもへにきんに。
こころことにもとこもれし。治人なればなりし。例
なしずいそがしうまうで。治て。人の(芸ノ人)(六芸ノ人)のれうへにこなし
る後。口おしともおもへらず。なまやうやともろ
ごろにあつかひ。ゆへる後。おとゞ(タム)はひとしれずな夜
ねたしとぞおぼしけるよひすうしすぐる程に
おかし(旬ノ)ましろ。もん夜のこれこのひさしぶんがし
によりておましまいれり。れ(ざい)麁や門。れいのれさ
らにまぐ。うるもしげにきよらにて。又ちいさきざい
ふたけに。くゑそくのさしどもいと。い夜めしう

きさせなて。もちゐまいらせなへり。めづらしからぬ
ことうさとくとそまくられ。おとゞ(タ)ひたりなて。夜(祠)
いたう更(ふけ)ぬるをとゝ。女ばしてそゞのしこうしこ
なへど。いと(句ん)あざれて。とこにも出給ふぞ。小方(雲井ノ兄弟之)の此
ちらしらの。右清つ皆。藤寧相ちとゞりもれし給
(句)らうして出なへるは。さ夜。いとうるひあり心
ちす。あるじ(タノ子息)の法中将。はさうづきさしげて。はゞこい
まいる。つぎくのはうちらけ。二たび三たびまいり給
源(蓋)中納言のいたうすゝめなへるに。寂(句ん)すらしほゝ思
なへり。けづらひしさひたりをとゝ。ふさひしかぎちひ(六宮を蓋ノ)
ていひしを。見し出ちちあり。されど(蓋)こうしらぬやう

まていとまめなり。ひんぐしの蔵(ぞ)に出ゐて。此ともの
人ぞもてもやし給。見しあり夜。上人どもいとおほ
かり。四位六人は。女のさうぞくにほそながそ人て。
五位十人は。三人がきれのからきぬ。おれうしもこれけ
ぢめあるべし。六位四人は。おやのほそながぞ。ちう夜な
ど。川はかぎりあること。波あらずおぼしかれど。地
の色しざ夜などをぞ。きらし波川くしゐへりけり
めしつぎとゆりなどの中に。こぐりがちしきまで。
いかしうなんをけり。(比)けまかくまぎりてもう茶やかな
なことは。こうかひあれば。地(ぞ)などにも。まづいひそこなり
まやあらん。されどくりしうは。そぞかぞへこそざりけるとや



中納言殿の御前の中におまおぼしあざやかなら
ぬやくらきまぎれにこちまじまとりなんかへり
て打るげきて、ゆが殿のなどかおいらかにこれ殿の御
むこまうちなりを給まじきあぢさる御ひとり
ぞこやと中門のもとまてつぶやきけるを、きこつを
給て、おかしとるんおぼしなる、夜のぬけてねふる御
まかれもてかしづれなる人ぐはこちよげにゑひさぐ
待てよりかしぬらんかしとうらやましきなめ
まうし、恵ハいりてふし給て、かしこるげなるわざ
なるうとくしげなるさ満しうるわや乃いぞぬて
もるれぬなるらひるれどこれか進火あるうかし

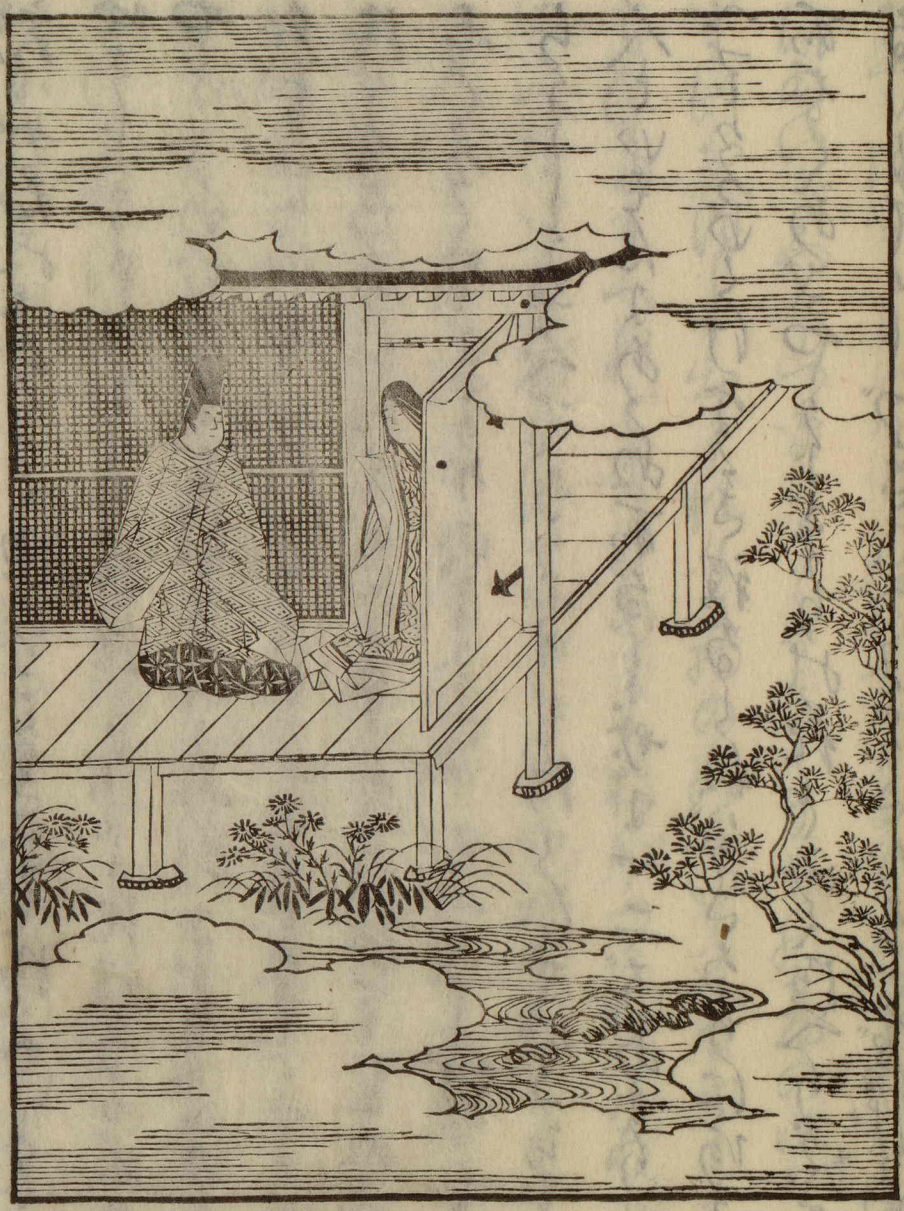
げて、そゝめきこゆるさうづきなどと、いとめやす
くもてなし給めりつゝかるゝ、みや(句)のはありさ海
とめやすくも出たてまつり給ふ、げに我にてもよし
とおもふ女子をもたらましかばこの家(句)をきこえて
まつりて、うち(内裏)にぶまえまいらをばらましとおもふ。
これもく家(句)にはしむと心ざしぬへるむすめハ
る线源(芸)沖納云にこそとそりぐにいひなしふなる
ようづが見えれくちおしくハあらぬなめれざるハ
いとおまりよづかずふるめいろ物をなどんをごと
をせらば、うち(女二ノ事)のはかしおあることまことにおがし
こんにかくのこもれうくおぼしば、いくすべから

むかもごてしきことはありとも、いくばあら
ん、いうまぞ故（大）忘はいとよくはこまへらん時にう
ましからむかしとしらるゝはさすがに忘もて
ちゐるまじきふるめりかし。例のねぎあがちな
ほつれぐるれば、あぞち（女三ノくりん女ミ）の忘とて、ひとよりはすこし
おもひまし給へるが、つがひ○にたりしてその後は
あかしのつ、何を通ふらんと、人のとがむべきにも
何ぬに、くるしげにいうぎおこ給をだ（あぜちん）ならず
おもふべかめる

うちわたし世にゆるしなきせさ河をこゆるれ
そめかん名をそかしなれといとおかしけ通べ

上 かゝらずうんハこゆれどもさけ乃志づまれ
うきひとつゆかぬは。地ふしとの給ひんまでに。
よのもしげるまさをこれうへのおきてハいづこぞ
やまのしうおぼゆらむくし。うまでもとしいのちて。
上詞 海くとハいはずそこをつまへいでゝこれをもすずめ
まてハおきえんとよえんなりひとまも◯まハおち
でいとゞいのしげてくるりゆくよるくれねざ
ゑんまハごみの世後の世までたまん世やられて衣なる
などもひまさらしてぞいぞ給。地おとまたうしき
まれくずをつくされども海のなまめしきみそな
しまやおもむなきけなくなどぞらべんまおも

と連絡ぶりそめれさまれごとともいひうえ
絡へる人のけぢくてぶまえてまつらがやとの
ゑむきこゆるまやあるがちに世とうむき絡へる
十三
家のれうこにえんとうづひつて海いりあつまりて
さふら海もあれなることかどくまつけ法くた
かうべし



白山 六君
家ハ女君此法ありさ海ひろこきこて給ふいとゞ法
心さしまさりまさり松浦きたよ紀程なる人君
やうぶいいとさよげまて、かみのさがりだかし
らつなるどぞ、ものよりことなあるめでことゝ
給ふる、色あひ阿まりなるまで匂ひて、をのく
志くなるかきかかのまこいとをづかしげよらう
らうじう、すべてなまぞすもたらひて、かたちよ紀
人といそんまあるぬ所なし、女ま一二ぞあまり給
へまなるいそけなすき程なるねばかたなりに阿ぬ
所なくあぎやかまさりの花とみし給へりかぎり
なくもてかしづき給へるまかたなるぞげよおや

まては心もまどハし給つべかりけり。たゞやハらか
にあいぎやうつきらうしこさるすハかれ屋のれ(中)ハ
まげおぼし出られける。掴の給ふいらへなども。たゞ
らひ為まへれど。まことあまりたがつ。明くハあらぬ。
まべていとこ所おぼくかどくしげなり。よさま
か人ども三十人ばかり。わらは六人。かるかなかなく。
さうぞくなども。例のうかハしきことハめなれて
おぼさるべかめれバ。ひさ為がへこころえぬまで。これ(好)
こそ(殺)志給へる。三条殿(でう)(雲ゐのいらこ)がらのおぼい君を。長家り
まいらせ給へ。かよりも。これ御るすとバ。いとことに
おもひをなてきこえ給へるも。家(白)の御気しまさ海

うらなめり。うくてのち二条院に。えところやまくも
わたり給ハぞ。かろらかなる御見ならねば。おぼし
まくにひるの程なるとも。え出ぬハ口ばやがておなじ
これこのまちにとし。ぞ出しやうにたりしまして。
くるれば又えひきよ給てもしたり給ハ須なるとして。
待どをよなるおりくあるを。かんらんずることとハ
おもひしかど。さしあたりてはいとかうしもや
ハなどりなるべき。げにんあらむ人ハかずならぬ身
をしらで。まじらふべき世にもあらざりなることとか
へしくも山路わきいでなんかど。うつしともおぼし
ぞ。くやしくなるしけ是ばなる紙ひで思ひてわたり

なんぴげにそむくさ海にはあらぜとも志がしんを
をなぐさめがや。まくげにもてなしなどもをば
ころうこてをはらめなど心ひと川に志ひあまり
てをげかしけまど。中納言殿にはふこをれ給。一日(文ノ狗)の御
事(こと)ハあざり乃つゝへ多りしにくハしうきて侍に
きかゝ御はころの名称なからましかバいかにいとお
しくとおもひ給へらるゝにをなろかなくらばの
こなん。さりぬべくハこばからもときこえ給へり。み
ちのくにがこにひきもつくろちばまめぶらてか
き給へるしをいとおかしげなり。故宮の御忌日
に例(れい)のことゞをいとたうとく世(慧ノ)さ勢給へりけるを。

中ノ
よ語こびそこて語へ御さまのおどろくしうハ
あらねどげに志しり語なめつもりし。例（慧心）ハこれかり
ふてまつる御返をぶるようちとけずつてましげり
おがしておろぐ志くをつぐけ語をぬをこげから
とさへの語へるがめづらしくうれしさ了。ころ
とさめさも志ぬべし。文（旬）のい御めうしくこれこ
ふち語へ御かどまておぼしをこうりまるもげに
こころぐるしくをしまるら御返バいと衰まておかし
やかまるるもなきに文をうちもなるぞ引久しく
見ぬ語へり。御返（返す詞）ハうけ語りぬ。一日ハひじつもぐち
ふるさ御まてことさらに志のび侍しも。さ（ハノ忌日ノ事）なまひ

給ふるやう給るころかひまてなん。ちぎりとの給
はせしつるこそ。すこしあさくなりまゝつるやうにと。
うらめしうも給へらるれ。よろ所はいまさゝらひて
なん。所なりしこと。すくよりは。志ろさ志さし乃
こはく志きまてあり。さて又の日の夕つかたぞわ
たりのへる。人志まぞ志ふ心しうひたれば。あいな
くんづひいこうせられて。なよくかたまる法ぞども
といとゞまほりしうへのへるは。あまりたど語く志
きまで所なり。丁子ぞめのあふぎの。もてなら
しのへるうつりがなどさへ。こと面んかこなくて。
おはしたるを。女志もあやしかりしよれことな

どおもひいで給ふおりくなきましもあらぬぞ
まめやかに衣なるほころびへれ人にて拙しぬ
とみるにつけて御てもあらましをとぞうりはたもひ
もやしぬ給かんなるにぞもいたけなきかどよし
おもせねばうらめしき人のほんぞへをしらぬ
にはなるにともいとゞこゝろなくしたしられしまふや
つねにへぶておほうるきいとおしく拙しひしらぬさ
海にしひぬふらんなどおもひ給てかふはこすのう
ちにいまなり給てもやのこすに木丁うへて我を
そこしひさいりてこいめしぬへりわざとめしとは
給らざりしうど其いならびゆるさせ給へりし

よろこびまたまうちをまいらまほしく侍しを、
わたらを給とうけ給りしかバおりあしくやをとて、
なふまなし侍まなる、さはさし比のまゝ語のまゝしも
やうくあらいれ侍るまやへぶてすこしうほらだ
侍まなるこすのうちよめづらしく侍るざうなとの給
まな(中ん)ほいとをづかしくいひいでん云の葉もなさん
ちまれど一(羽)日うれしくさく侍し心のうちを例のた
ぶうじまがら是ながら通し侍なバ思ひまるゝこりしを
だよいうでかハと口おしさまといと問ゝましがな
乃この給ふがいらく志がきて、多しぐかのかり
きこゆれバ心(慧ん)もとなくて、いと(羽)遠(とを)くも侍るか所まあ

やうまきこえさせうけ給ちらまほしき世の物語も
侍るものをとの給へば、げ(中心)まとおぼして、すこしうじ
ろきより給ふけりひをきて給ふも、ふ(慧心)とむねうちつ
ぶるれど、さりげなくいとゞ志ばめたるさ海して、宮(白)
の御ことを語ばへ、心かぼまあさうたかしかりとおぼ
しく、ゆ川ハいひもうとめ、まるなりぐさめも、うるさ
がるこに志ばくときこし給つておかせ、女(中心)君ハ、人(白)の
御うらめしさなどハうちいでかたらひきこえぬ
べきるすまもあらねば、たゞ世やハうなるとやうま
おもしをて、ことばくちるまぎらかしつゝ、山里す
あらさ海まつうしたまへとたがして、いとねんで

ろよ志ての給それ（葉詞）いしをごころひと川よまりせ
ては元法かうまつるまじきるよ侍るなり程家（句）
さて心うつくしう寄とさせ給て今れ法かし給よ
志ろがひくなんよく侍べきたらずハまこうしもたが
ひめまて心がろくもるどおぼしものをんていと
おしう侍りなんさごよなるまじうハみちの程の法
をくりむかへも行りこちてつうまつらんよなるれ
たぶかりかは侍らんうしろやまく人まゝぬこころの
わどハ家（句）もえなるしらせぬへりなどもいひなぐら行り
おりはるましかこれくやしきを志るしおりなく掴
まもがれやとまりかへさ海かしきたまるどかの先

かしつゝやうくくらうなりけるのでおはせるよ。
いとうるさくおぼしてさらがこゝちをなやましく
のゝ給ふ。又よろしくしなへしんなどよなまごとを
そていり給ぬるをしさたるが。いとくちおしそれバ
さてもいつぞりまおぼしたつべきよう。いと志げう
給しうちの草もすうし打たしハ世給ふんかしと。
こゝろもりまさこしなへバ志がし入さしてこれ月を
ゑぬべかめれバついこちれほどまもとしそハ志給れ。
たゞいと志のびてしそよろめ。たまゝ世のゆるし
などことくしうゝとの給ふ志のいうじうらう
ゆげちるゝなすとつゆよりもむかし志いでらるゝよ。

えつてみあへで。よりぬ給へるはしられもとの。
すぐれのしるさより。やとらをよびて。此袖をひろへ。
女(中ム)さりや。ある心うとおもふまたるまごとかはいはまん。
抱もいそれで。いとゞひきいり給へば。それにつきて
いとあれが目に。なからはうちにいりてそひふし
給へり。あらぎ(荒詞)や。思びてはよろべうおぼしこともあ
けるが。うれしきはひがみくらと。望しさせんとぞ。
うとくしくおぼすべきにもあらぬを。心うれ御
気色やとうしこゝあへば。いしへ(中ム)しべきこうちもとず。
しはずにふくしひなりぬるを。せめてししづめて。
おもひ(詞)のかなりけるは心のあどうな。人のしふらん

ことよ。あさましとあぞめて。なきぬべきかしなる。
すうしいことわりなれば。いとおしけれど。これはとが
あるぞうりのことかはかぞうりのこいめんを。いまし
へともおぼしいでよかし。すぎまし人の所ゆゑ
しをありし地を。いとこよなうおぼされまかる
こそ。中こうこうてあれ。すさぐ。しくめざ後しき
心はあしじと。心やまくおぼをとて。いとのどやかに
もてなしなへれど。月ごろくやしとしひつる
心のうちのくるしきまでなりけさ後とつぶくと
いひつゞけ給て。ゆるすへきかしきまもあらぬよ。
せんかさなくいらじともよのつゐなり。中こはげよ

こころ志らざらむ人よりも、たづしうんづさなくて、
ない給ぬるを、こは（葉詞）なぞ何なわりくしとハいひなが
ら、いひ志らずらうしげに、こころぐるしき抱から
よういふくたづしげなるたひなどのごし
かどよりも、こよなくねびまさり給へりけるなど
をゑるに、こころからよろ人に志るして、かくやそ
からず抱をおもふことく、今や志なよもまゝしげるね
いなれけり、ちうさふらぬ女だうふたりだるを
あまどすぐ給なるおとこれいりきたるならば
ようは、こはいかなるすぢとも海いりよらめ、かく
うとからず罪しかかし給はなからひなれば、さ給

やうこそハあらめとおもふまゝにいひつけさせ。
あゝずかしてやすらあらずあるらず。いとおし（地）
さや。おうしらこ君をいうしへとくゆうんの母びがくさ（慧）
るじらも。いとあづめがうらめべうめれど。むうしぶるまき
ゞうろもし眼ころ我よういふれバ。おう我いとさうひの
まのゝにまうてなしきこし語ハざらうろ。うやう乃まそ
らをつこ海うまもえなんまゐびつでけざらうろ。うひ（慧ん）
あすさ地からく人め我あいあすさ法あへぐよおろ河り
ふ過してゐでぬめくまぐさよりひとあひつ連ど。あいつま
ちからあらまろうどみとがむろひとまやあしむ世。
ゆづらへし泥も。女の性ゝめいにとかしくさづうし。（中）

わづらはし紀も。女のはらめれいとかしきぶかし。

なやましげよきてわたるはんちんことはりぬかり
いとたぼうしとおもひ給へりつる。うし（しらいまんのうす）れ志るし
よ。おほくはこころぐるしう覚えてもやこゆるれ。
猶いろおこがましれこころやとおへど。なきけたる
らむことは。な後いとかいなるべし。まるたちま地
のわがきて給こぶれよまうをて。何ながちなるこころ
とつひて。のち心やまくしをえあらざらんもの
ならわりなく志のびはりうんかどもこころづくしよ。
女のうるぐおぼしこぶれんことよなど。さうし皇
志ふよをうれぞ。いほのまも恋しきぞ。ほうしなるり
なる。さらにえでハえあるまじくおがし給を。遊（地）て

あやまくなるころなりや。むかしより（蓋ん中ノ事）はすこしかそ
屈ぎて。あてはらうこらつるけらひなどは。こち
もなれこらともおぼえぞ。身はそひこらんちして。
さらはことくもおぼえぼなりはこらうぢはいと
けこらまほしげはおがひなめるを。さもやまこし
まこしてましなどしへど。まさはこのはゆるしなひ
てんや。さらとてしのびてもこいとびんなるしむ。
いるさ後ましてかは人めみぐるしからで。しふこころの
ゆくべきなど。こころもあくがれて。ながめふし給へり。
まざいとふるさあしこは。はふこあり。例のうたべき。
いとけざやうなるこそ父はて

いづらまつけつるみちの露しげきむし
たがゆる秋の宮ゐれ、はかしたのこころうきハ、とえ
里しらぬつらきのこなん、きこしさせんかこなくと
あわ、はかへしなからんも、人の例なら、後見とがむ
べきを、いとくるしけまバ、うけたまはりぬ、いとなや
ましうて、えきこえさせずとぞらうきなへうと、
あまりことぞくなくはかれと、さうぐしくて、
おかしかりつるはけはひのこ、忘しうしひ出らる、
をこし世中をもしりなへはをまや、さぞらあ
さましうわりなしとハしらへりつるもれから、ひさ
ふるまいぶそくなどハあらで、いとらうくしく

もづかしげなる気色もそひて、さすがになつかしう
いひそしらへなどして、いざし給へるかどの出ん
だんなどと、おもひ出るも、ねくさうをかなしうを
さ海ぐに、心にうくまて、まびしくおがゆ、なまぐす
をいましへにハ、いとおほくまさりて思いでら海
何かハこれ家(句)かれたて給ながわ道をたのもしぐに
志給べきにこそハあめれ、さてもあらかれて、こころ
やすきさ海にはえ何らじと、志のびつくまゝ思ひ
ましてんなき心のとまりまてこそハあらめなど、たゞ(地)
このるすれこつとおぼゆるぞ、かしからぬこころなる
や、さばかり心ふかげにさしがりしまへど、かくこと

いふ物のこころうかりかるゝとよ、なるき人(六)の出かれ

や、さばかり心ふかげにさしがりしまへど、かくこと

いふ抽のこころうかりなるゝとよ、なるき人(大)のはかれ
しさは、いふかひなきかなこまてもいとかうくるし
きまでハなりなり、これハよろ川よぞしひめぐ
らされ給なる、(慧心)ふハ(白)家わたらせ給ぬなど人のい
ふをきくにもうしろこのこころハうせてむ○う
ちつぶきていとうらやましうおぼゆ、(白心)家ハ日ごろ
まなりになるハまぶ法心さへうらめしうおぼされて、
ふりにわたり給へ(中へ)海なりなり、何(中心)ハこころへぐて
たるき海にもみしこてまつらじ、山里にとしひた
川にをこのもしべにおもふ人(慧)もうとましき心をひ
給へまなりとこゝぬに世中いと取をうおもひなる

是てお後いとうき分なりやりとたゞ見てせぬ
程ハあるままるせておいらかなるんとおもてくいとら
うたげまこころうつくし紀さ海まもてなしてゐる
まへ是がいとゞ白ん衣まうれしくおぼされて日ごろの
をこゝろなどかぎりなくの給ふ中ノ流いらもまこつし
ふくらうまるまるまるにかれそぢ給ふるしれおびのひ
きゆえれたる程などいとあえれままぐうら海人を
ちかくてもこゝぬいぎりやれがめづらしくさへおぼし
たりうちとけぬ六君所まるらひぬてよろづのもす
心やまくなつかしうおぼさるまゝになろかなら
ぬことゞもをつきをずの給ひちぎるを中ん見てまれ

けてをかくのこれとよきわざなやあらむとあれ
がちなりつる人(葉ノ事)のけれしれもしむしられてどしごろ
あはれなりけんぞんとはしわらりつれどうしはなる
ざ海まてハ衣をもあるまじきるまとしふまぶ
これ(旬ノ事)けゆくされのこれめそいでやとしひるがらも
そこしみくとまりなるさて(葉ノ事)もあさましうしもめ
しゆめていりきたりし程よむしれ人(大)まうとく
てをましるまなどうたり給し心ぞんハげにありが
たりけまど粗うちとくべくあらざりなりしな
どいよく心づかひをしはしまもひさしくとぞ給
えんことハいと物おそろしうるべくおぼしたまへぞ

ことはいでゝはいそねど通ぬるうたよりハ其こし
まつりしざ海にもてなし給へ海を家（白ん）をいとゞか
ぎりなう河かれとおぼしたるに、かれひとの（苦ん）はうつ
里がれ、いとふうしきこまへるが、よれつ○乃うう
のうよいれ、こきしめゐるにもまず、しる紀白ひ
なるを、そのうちの人にしおもしれば、あやしとぞ
めいで給て、いうなりしことぞとかしきたり給に
ことの（中ん）わるにもてもなれぬことにしあれば、いそん
もこなくわりなくて、いとくるしとおぼいたるを
されば（白ん）よ、うなるぞさるなりハありなん、よを爲ぐに
はしりじとおもひまたることぞうゝと、はこゝろ

さはぎかり。地ぎりはひとへのはぎなどを。ぬぎかへ
給てげ進ど。あやしうころよりかまぞ。男よし
ふまけり。白詞うそかりまてはのこりありてしも坂しじと
よろげまきてまくの給ひつゞくるに。中心ふうくて。男
ぞをきどこ給なき。白詞おもひきてゆるさ返しとなり袖
を。かし進こうさきまなどかやうまうちそむくきたて。
ことまこそあれ。又はてろを女給ばりけかじやは
面ぬる。おもひのかまうかりかるはんかれと。すぐ面て
まねふべくもあしず。いとくおし げに罪給へど。中と
をかくもいしへ給をぬさへ。白心いとねてくて
白又人になれかるそでのうつりがを我身に志めて

うしゝ法ゝれ。女(中ん)はあさましうのぬひつゞくるゝ。
きこしんかゝるまなを。いかゞはとて
見(中)るれぬる中の衣とこれらし給ひぞりま
てやかけもるまなん。とてうちるき給へるをし給の。
かぎるもなう衣なる給ふるまも。おしれ(旬ん)はぞうしと。い
とゞこゝろやましくて。まれをかろくとこぼし給
ぞ。色(地)めし給はこゝろなるやまくとおいみじきあ
やまちありともひとゝあるまは元ぞうとゝんもつまし
く。らうしげまこゝろぐるしきはまの志給へれば元(旬)
をうしみもてぬ。ぞの給ひさしつゝ。かはいうしへ
きこし給まゝの日をこゝ給のどうまおほとのごを

里おなしてはてうづはかゆるどもこゝろこまかりす
はしつらひなども（匂ひ）さばかりかくやくだりこ海もろ
こしはよしきあやをこちかさゝろめうつしに
ハよのつねにうちなれこゝろこちして人（中）ぶれそが
こもなへだみこゝろうちまじ里などして いとしづ
かにまハさう（中）志もなよくかなりうれいろどもす
なでしこれかうながかさねてうちこぶれ給へう
はさ海のなまごともいとうはりしくことくしさ
までさりなる人のはよそひなまくれにしひくら
ぶれどけをそりてもおぼしずなつかしうおかし
きもこゝろざしのをろかなるぬにそぢなれなめ

まうし。まろまうつくしくこえ給へまし人乃。すて
かうやぎゝ海まいろハいよくしろうなりておく
まおうしげなり。うゝ海はうはまがなどれいちぶう
うらぬおりぶま。おいぎやうつならうたきところ
などのな後人まはおほくまさりておぼさるまく
まは。これをもらうらなどまはあらぬ人の。げぢうく
いひうよひて。ことまふれつて。をのづらこしけもひ
をもきゝこれ見んハいうでうたぶまをおもいんうなら
ぞしうおもひよりぬべきことなるをと。わがいとくま
なすきは心ならひまおぼししらし海見がつねすん
をうけて。しうきはまなるふこなどやあるとち

うきこづし。こがらひつるどやうれものとも。さりげ
なくて見ふまへど。ちうものをなし。ふぐいとすくよ
うことずくなまて。なほくしきなどぞ。わざと
しるけ是ど。掬ましりまぜなどしてもあるを。何
やしなほいとうくのこハあらじかしと。うたがハゆく
ま。いとゞ（比けん）ふハやそうらばおぼさるゝことなりなを
かし。うれひ（旬ん）（恙ノ事）とのかしきを。こゝろあらん女のおいれ
とおもひぬべきをなどてかハことのかかまはさし
なるたん。いとよきおいひなれば。かゝることまぞしひ
かはすらんかしと。しひやゆぞまびしくいらなく
しくねたりかゝる。なほいとやそうらざるかれぞ。

それ日もえいで給ひて、六条院(六五)にはれ文をぞ二さ
び三たびまれ給ひ、いつのかどにはもりけっと思
葉ならんと、つぶやくおいびどもしあり、中納言(三十八)の君
八、家(白)のうくこもりおかすりをきくにしも、心やまし
くおぼゆれど、けりなしや、けがこころのおこがさ
しうあしきぞかし、うしろやすくとしそめてし
あるりのことを、うくもしふべしやと、しゐてぞ思
ひしてさはいへどえおぼしもてざめりしと
うれしくもあり、人(中)ぞのけかひなどのなつかしき
かどになすへどもなりし、此しやり給て、母家(女三)のれ
うこにまいり給て、よろしきまうけの物どもやさふ

らふつふべきことなんと申給へば。例乃（女三詞）ことゝむ月
の明うじ此進うは。志ろき物どもなどやあらん。
そめしかなどは今ハわざとを志をかぬをいそぎて
こそとあせめとの給へば。なまかうとくしきよう（業詞）
よも侍らぜざふらいんは志るがひてとゝくみくし
ぜ殿などはとハせ給て。女のさうぞくとをあまる
くぶりは。きよげなりかそかがどを。志ろきかひね
里などしてあるは志るがひて。たゞなりきぬあや
などとりぐし給。えづからは此進うとおぼしき
よは。まがは進うはあらん。くれなゐぬうちめなべて
なるらぬは。志ろきあやどをなど。詞まるかさね給へる

まゝそう海のぐるりはうまいうまいこゝはよりありけん。
こしれひと同ありけるをひさむまでびくりへて
　　蓋むまでびくりちぎりことなるしるひをとゝ
ひとすぢまうらみやハすゝたいふの君とておとな
たとおもしき人のむつましぎるる人まつりまゝ。さる
あへぬさ海のみぐるしき代。つきぐしうもてう
くしてゐんとの給て。はまうのハしれびやうなれど。
そこまてつくこをことなり。はらんぎはせねどされ
ぐもかやうなるはこゝろしひをつゝのことまて
めるれこゝれバ。かしれどみへしなどひこしろふ
べなまもあらねバ。いりぐなどをおもひ。ひづらもで。

人ごまちちしなどしたれば、そのくさしぬひな
どもつかさ人ごのおまへちかつかうまつるなどとう。
とりまきてはつくろひたりべな。志もほかへどもの。
こうなへだみたりつかすがたどもなど。志ろきあらせ
などまて。けちえんならぬぞ中ごめやすりかろだ
まかはなまぐすをもうし給こうしづき字ゆる人乃
あらん。家ハとろかならぬ法心ざしのかどまて。よろづ
といかでとおぼしをきてこれど。こまかなるうちく
のるまでハいかでハおぼしよらむ。かぶりもなく
人まのこうしづかまて。ならハせ給へまバ。世中志
うちあハばさびしきこと。いかなる物とも志り給

ハぬことハりなり。えんにそゞろさむく。花のつゆを
もてあぞびて。世ハ生ぐすべき物とおぼしたるかど
よりハ。おもかしひとのためなる事ハ。をのづからおりぬ
しまつけつゝ。まめやかなることまでもあれかひ
志しせ給こそ。おりがたくめづらかなるすなめれば。
いでやなどそしらハしげにきこゆる。はめれとなど
をありけり。けらハべなどのなりあざやかなるらぬ。おり
おりうちまじ里など志たるを。女君ハいとをづかしう。
中々なる事まねなりも知るかれなど。人志事ハおがれ
事なきにしもあらぬに。ましてこれごろを。世にひ
びきたるは有信の花やかさに。かれハ宮のうちの人乃

見ふかんことも人げるきことおぼしみぐるこ
とをそひてなげうしきを中納言の君ハいとよくを
しもりきこゝぬへバうとうしむあたりにハこぐるし
うそぐくしうりぬべきころ志ひのさ海も何か
づかとはなけ是どなまかハことくしく志てがほ
なるんも中々おぼしなく見とがむる人やあらん
とおぼしなりなり悪ノ海ぞ又例のめやすきさ海の
ものどをなどせさをなりて此こうちきをしせあやの
是う給ふせなどし給なり此君しをぞ句なもな
とは聞て給ハず さ海ことまうしづなしてられてかこ
ハなるまでころをごりもし世をなりひ出まして

あてなるんぞ夜もこよなるけ是ど故八宮の法山ぞこ
をみそめ給しよりぞさびしき所にあされさハさ夜
ことなりなりとこころぐるしうおぼされて なべての
世をもおもひめぐらし ふうきなさけをもならひ
給はなる いとおしの人なくりしやとぞ うくてな給
いでうしろやすく おとなしき人にてやこなんと
おもふにも志ゝがなぞ心にかゝつてくるしなれば法
文などをおしよりハこ夜やうにて ともすれば悪
びあまりしるなし記みをつくしてこゝろを 外ぞいい
とまびしさるにそひにしる方とおぼしなげうる
ひとへに志しぬ人なしらぞ何なる抱ぐるおしとぞしれ

なめさしも取たんは竜やまとうべき様むかしより夜
ことなりたのもしべきはなるひきて、いまのさらはなる
あしうなるしむ竜、中こ人め何しうべしさすがに
何さもうまもあらぬ此こころぞへ何りさ夜のおも
れを志らぬまはあらぜ、さるとてこころかけしが
かはあへ志らいんも、いとつくましくいぶいはべから
むと、よろ所は志ひこぶれ給はさふら女人ぞもすえ
しものゝいふひありぬべくわうやうなるは、みなあ
こゝ志き心ちして、こゝのひなれたる人とてはかれ
山里のふる女ばらなり、志ふことを竜おるじんはなる
うしう、いひあはすべき人のなきまくは、故姫(大)君を

おもひいできこし給ひぬれりなし。おりせましかば
これ人(慧)もかく御心もそへ給ひましやと。いとうなし
う。(匂)えめのつらくなりぬりんなげきよりも。はくといと
くるしう。覚西。(慧ん)おとこ君をしぬてしひまびて。例の
しめやかなるタつかたおりしたり。やがてたしまに法志
とねさしいださせぬて。(中詞)いとなやましきかどにて
なん。えきこしさせぬと。人して男しいだし給へり
をきくに。(慧ん)いうじうつらくて。(なぎ)泪のおちぬべきを。人
めにつゝめば。しぬてまぎらりして。(詞)なやませたま
ふれりは。しらぬ僧などをちかくまいりよりを。くすし
などれつらにてもゑんそのうちにはさふらぬまじう

やはうく人づてなりけきうそこなんうひなき心ち
せ家ときこえねて、いとものしげなりけれ、しれな
ほを、一夜袖の気色こし人ごげにやいとみぐるしう
侍めりとて、もやのこすうちおろしてよねれ僧の
ざまいまなるを、女(けん)若まことに心ちもいとくるしけ
まど、人のかういふまうしてかちえんならむを、又い
うごとつまりけまば、袖うなづらすうしねざりいで
こくらいめしねへり、いとかのうに時ごものの方給ふ法
ぜりひの、放(蒸ん)(大)君れなやこそめ給へましころまづお
もひ出らるしを、ゆくしううなしうてうきくらす
ふち志ねへぞどんに袖もいとれぞらあらひつくぞ

男の語こよなくおくまり語へ家もいとつゝゝて、すの
志さより本丁をすてしをしいれて、例のなれく志
げまちづきより語がいと（中ん）くるしなれがわりなしと
おぼして、かねの君といふ人をちうめしよせて、む
ねなんいさ記志げしをさへてとの語をきて語て、む（芸詞）
ねをさへうるいとくるしう侍るものをと、うちな
げきてゐるをり語ゆどをぞよぞ志さやそからぬ
いなれがくしもつきまちやましうハおぼさるら
む、人まとひ侍しうが志げしこそんちをあしうなれ、さ
て又よろ志きおりありなどこそをしへ侍しが、なま
まわらく志くもてなさせ語なめりしとの語了

いとなづかしうて。むすめ（中詞）はいつともなくかくこうは侍ま
むかしの人（大）もさこそはものし給しが。なかぐ御まじ記
人のまゐわざとか。人をいひ侍めるとぞの給ふ。げに（是ん）
これもちとせの松なるらぬよと思ふまゐ。いとこゝ給
ぐるしう衰なれば。これめしよをこゝろ人（かね）のきゝんを
つゝまれず。うゝはいゝおもぢれて。と紙こゝろえりと
どむれ。むかしより思きこゝゆゝ御まなどをかれ御ん
こひと門にはんえさせながら。人はみかくてはまもさく
まじ記さ御によくめやすくぞいひなし給をげに
ありがた記御こゝろぞへにもとき（かね）てゐこりかり。なに（地）
なすにつけてを故（大）君の御なすをぞ御きをぼ思ぬ

へだ。いんけるよしかどもら。世中をそむきはてゝ。
やらぬべきさんぶんひとのこるらひ侍しをぞうるべきは
御侍らんうしらむ物うらそろうたすらば。忘うめなり
しひとふしはうれかいのひじりもんぞさすがはゑめが
ひやまはらん。なぐさめぞうはこゝはもうしこゝは竜
もうづらひて。びとのあらさ歯ときんはつきてま
ぎうくるすもやあらむたまじ。おもひようおらく侍
選ど。ぶらはかうざ歯はけるびくべうも侍らぶら
そり。ぶろびけは忘がへわびて心のひくうこのつよ
うらぬわざもらくれば。すきぐ歯しなやうはお間
るらんとそづしけ選ど。あるまじれころろ乃。

うけても侍らばこそめざましうらめ。こゝかゞうり
のかどまで。時ぐおもふことをも聞てさせうけぬ
るどして。べゞてなくの給ひよいんをこれかハとゞめ
いづべな。世の人まゝぬこゝろの程ハ。兄弟人にもど
うるまじく侍りを。稚うしろやまくをおもほした
まるどうらみくるまさゝきこゝ給うし（中伺）詠める
くもひ聞てだうくあやしと人も兄おもひぬべ
きまでハきこゝて侍りべくや。年比こゝるゝうなるに
つけつゝ。みし浦るすぢをれ侍しかばこそ。さまことな
なるこのもしびとまて。今ハこれよりなどさへ。れ
ぢろうしきこゆまとの給へバ。（恵伺）さやうなりおりも

荒て侍らぬ柚をいとかしこなる車(こと)におぼしをき
ての給たすかやこれは山里いでこちいかぎり
からうしてめしつるせ給べき それもげにはらん
じ志ゐるありてこうはとなろかなやはおもひ侍
るどの給てな後いともれうらめしげなれどき
くひとあれはおもふまくまもいでかつゞけ給はん
ものかたをたすがめいぶしたれはやうくくらうなり
まろうにむしれこゑだらりまぎれなくて山のかた
をぐらくてなるのあやめもしらぬにいと志めや
かなすかはましてよりぬ給へるも中心(中心)つらいしとのを
うちにはおぼさるかぎり(恵得)ぶるあるなどいと志び

やかまうちずじて忠義へまびて侍り。そとなし乃
里をもとめまほしきを。かれ山里のわたりまま
ざと寺などいなくとを。むかしおぼゆる人がたをも
つくり。忠まもかきとめて。なこなひ侍らんとな
む。忠こまへなりまたりとの給へば。あれ（中詞）なる所ね
がひま。又うたてみたらし河ちかきこうちする。
人がたこそおもひやまいとおしう侍れ。こがね
もとむる忠しをこうなどうしろめたうぞ侍
るやとの給へば。そよ（兼詞）そのたくえを忠しもいかで
かこうろまいかなふべきわざなりしん。ちかき世より花
ふしせうたくえを侍るをさやうなりしん屋んぐ

忠の人をがなかなど。さき海かうぎ海にまゐすまんか
さかなきよし。我なげき給ひし。我のいと心ふかげな
海もいとおしうわづらはしうて。い(中)海をこしすべ
つまりて。人(詞)がこれつゐでに。いとあやしくしひよう
まじきるをとそしいで給れとの給けれひの寸
こしなつかしれを。いとうれしくあれまて。何(芸詞)
ごとにいふまゝに。本下れしるよりをとゝふ
道バ。いとう(中ん)海さくしひなら海道ど。いかさ海まし
てかゝ海心をやめてなぐさらにあらむとしへ。ごこれ
ちかき人のおもはんことのあいなくて。さりぎなく
もてなし給へり。さしごろ(詞 浴無す)は世にあらむともしら

ざりし人のこれ夜ばと聞きところより抱して、夜
づまいでたりしをうとくハ思ふまじけれど、まる
うちつぎまさしもなまゝはむつびおもいんと思侍
し聞ざいけこゝろきたりしこそあやしきまでむ
かしの人(大)のはれたひまゝよひたりしが、衣におぼく
なり侍しが、かゝ(芸ノ中を)見るどかうおもなりしの給めるハ中
くなるまゝをあさましうもてなるれたりとなん
みな人ぐもいひ侍しをいとさしをこのすまじ聞人
のいでゝハさハありけんとの給を、夜(ゆめ)がたり(芸ハ)かしとま
できく、ざ(詞)ばべきゆへあれバこそハざやうにもむつび
きこそら侍ら見るどかいまゝでかくもかすめ給を

ざらんとの給へば、いさや（中詞）そのゆへをいかなりけん
ことくもしわり袴侍らば、ものたりなきありさ國
ぞもまて、世はおちとまりさぶらへんとすらむこと
とのゑうしろめるぞよおぼしたりしことぞをな
たぐひとりかきあつめてしひしられ侍りまする
あひなきことをさへうちそへて、人をきてつる面
んこそいとくおしかるべけれとの給ふ氣色をも
（蓋ん）家は、家（ハ）の悪びて拙などの給ひけん人の志乃ぶ
ぐさつゑをなくちけりなるべしとうしつゑ（蓋詞）まるち
との給ふゆかりは見てとまりてかぞかりまてをれ
なじうハいひもてさせなてよといぶかしがり給へ

ど・さすがに(中ん)かくはいふくて・えこ海かまもさてゐ
いぶ・ふづ(詞)のむとおぼせんあらば・そのけるりとは罕
え法べ々れど・くりしうハしを・えしらぬや・まるあ
まりいちぐ法心をとりをしぬべきことにあるんとの
ゐへバ・世(恙詞)とうえなりまを・むのありかふづのにハ・て
ろのうぎりすゝえぬべきを・いとさまでハしるまへ
らうべきにハあらざるれど・いとかくなりぐさめんか
ふるきよりもとしより侍る・ひとがるのねがひぞ
かりまはなどてかは山里のかんぞんにもおもひ侍
らざらん・なほたしかるの給はせよとうちつけに
をめきて給・いさや(中詞)いましへの法(八)ゆかしもなりし

こと紙がうまでをもらしきこゆるもがりハいとく
ちがうけまど。為んぐ忍のこくこもとめ給がいとお
しさまこそかくもとて。いとゝをさ前に年ごろへ
まかんを母なる人のいとうれりしきるまおもひて。
あるがちまこづゆよりし紙だしたるくもえいら
へで侍しまものしらしなりかのかるりしかバ
まやなまごとをしし程よりハこづるしからずな
んえしこれをいうさ海まもてなさんとるげく
めりしに。佛（芸ノ本、そんとの給より仏と云）まるらんハいとこよなきるまこそ
ハあらめさまでハいうでかハなどきこと給さりげ
なくてかううちきさし給をいうでいひそれ川
わざをがれとおもひ給へ家と見るハつらけまどさ

なくてかうりうちきさしあるといひそれ川

わざをがれとおもひ給へ家と見るれつらけ是どさ（蓋ん）

まぶまあれなりあるまし記とくハふくしらま

へ海ものから世せうまいしさなるさ海まハえもて

なし給ちぬを見しりぬへるまこそとおもふん

ときめ記ま夜もいふう更りをうち（中ん）まは人めい

とかくいらいくそんとおもてうちたゆめていり給

ぬ是ハおとこ（蓋ん）君とゝりとハ返くしへど狂いとう

らめしうくちおしきましきづめんかくもなき心

地して海のこぼるくも人まろかれバよろづまし

ひみぶ海是どひくふるまあさまかなるんもて

なしとくなすをいとうくそわがためもあひなる

べくれば、ねんじ返して、つゝ口よりもなげきがち
にて出ぬぬ。うくのこおもひてハいうじすべくらんぞ
ほしうをあべいるな。いうまして、かハおほかた乃世
のもどれあるまじきけまにて、さすがにしふんれ
うるぬつざとバしべくらんなど。おりこち進んし
こうこゝろなしねバまや。わが為め人のこゝめもこて
ろやしるまじきことなり。まりなくおぼしあらず。
（深水ノ子）まこりとのこまへる人とも。いうでかハ海しとと
ハ見るべき。さだうりのきこなれだ。しよりしよ
うこうハあらばうを。ひとのかいにもあらずハう
ほさくこそ河るべくれなど。なをそ（深水ノ子）なるこけまにハ

ころもたらず。宇治のこやを久しうこゝろ時は
いとゞむかしとをくなるんちして。すゞろにんがう
けしだなるが月女よ日乃かどにおりしたり。いとゞ
志く風のこゝろちひて。ふすごうあらましをなる
あれをものこやどもりて。人がげをみしぞこゝろに
まづうまくらしうなしきるすゞりぞりなる。弁れ
あまめしいでこれば。ぢうじぐちにあをまびの木
丁さし出てまい出り。弁詞いとかしこかれど。ましてれ
そろしげに侍出ば。つくましくなんとまゐにハ出
こぞ。蓋詞いかなるぬ給らんとしやうにおなじんなる
人もなるさ物語もきこゝらんとてなん。ぞうなくも

つまりそし月かれとて涙をひとめうけておハする
ま老(弁ム)ハいとゞさらにさきもあへぞ人(詞)のうへうて
あいたくあをおもひはめりし比のそらぞうしと花
もひなへいづるまいつと待らぬ中まを秋の風ハみ
ましそてつらうおぼし待てげよかれ(大ノ)なげ世給め
つらしを志るき世中の法師りさ海とかのうまう
け給もさ海ぐまなすどきこゆれバ(慧詞)どあることもか
ゝ海るすもちなぐらふ是バな我るやうをあるをあぢ
きなくおぼし志ミくんこそ行がおやまちのやう
ま程かなしくれこの比の法有様ハなかふかうれこそ
よれつねな是これどうしろめたげよいそしきこそ

よれつねなき。これどうしろめたけよいそしきこそ
あはざめり。いひてもくむなし。和宝よのがりぬる
かゝりのことそ。これものがれぬるすなぐらをくれ
ゐきざれかどは。粗いといふひなりかれとても。
まるなき給ぬ。あざりめして。例のうれ法(き)日の種
かとけのことなど乃給ふ。さてこゝにかく時。もの
まるまつりてもかひなきことれやしらばおぼゆ
ぶが。いとやくなきをこれしん殿こがらてかれ山
寺のうるはらまぶうたてんとなんおりふを。おな
じうはそくいじめてんとれふまひてだういくれ
らうどもそうぢうなど。あるべきことぞうさいで
の給ひなど世き世給を。いとたうときことしきこそ

志ゝ事。むかしの人乃ゆへあるは事まゐに志めつくり給
かん所をひきこがこんもなさけなきやうなれど。
それはこゝろざしもくどくのうちにはすくみぬべく
おぼしけんを。とまり給はん人ごとおぼしやりてえ
さはをきて給はざりしにや。山海は兵部卿宮の小乃
うちこそは志り給べかれば。かれ宮の御つかやうとをい
ひつべくなりにしり。さきばこてなぐら寺になるさん
ことはびんなるべし。心にまかせてさもえせじ。所
のさ海もあまりに川づらちく。げとうにもあれば。
ち代志ん殿をうしなひて。ことざ海にもつくり
うへんの心にてなんとの給へば。とさ海（あざり詞）うりざまに

いともかしこうかうとさはこころなり。昔われを
なるしこそ。がねをつくこそ。おまへのそしくびに
かけて侍し人を。佛のはたう蔵んまてかれがれ
のふくろとすてゝつぬよひじ里の道をいり侍
里よなる。これしん殿をはらんぞろよつけて。はこ
ころうご記おりしますらん。ひとへにこいぐしき
はなすなり。まさ後世のはしてめともなるべきこ
とに侍なり。いそぎ法かうまつらすべし。こゝにこ
のたゝせのえらひ申て侍らん日をうけ給て。
拙のゆへしりたらんたくさ二三人をぬりてご後
なることゞもハ。仏のはなしへのまくにつかうまつ

らを得らんと申せ。もうく（恵詞）のこまひさぐめてみ
さうの人ぞをめして。これかどのことぞを。あざり
のいえんまくにまべきよしなどおかせ給ふ。たゞ
なくくれぬれば。その夜ハとゞまりぬぬ。しゐ（恵心）ぬび
だらしそハみめとおぼして。こちめぐりつゝ見給
へぞ。かとけも見ゆかれ寺にうつしてがれば。おま
君のをこなひのぐれこあり。いとたゞなげにすまぬ
ふるを。家にいるにしてまぐすらんとこぬふ。（詞）これ
しんでんハうへてこつ夏さやうあ。つくりいでんか
どハかれらうに拘し給へ。京の君にとりけこさるべ
き拘などあらば。法さうの人めしてさるべからんやう

きゝ物などあらば。はさうの人めしてさるべからんやう

まものしぬへなど。まめやかなるすぎをとらひ
給。かかりてハかだかりはぐすぎたらん人をなま
うと見いれ給べきにもあらねどよろもちくふせ
て。しうし物がたりなどをさせ給。故(ニ)権大納言(ごんこいなごん)の君(柏木)は
はありさ海をきく人なきに。心やすくていとこさ
やかに聞ゆ。今(弁詞)はとなり給し頃どにめづらしうお
はしますらん。はありさ海をいぶかし。れ物におもひ
聞えさせ給めりし。はかしれなどは。おもひぬへいで
らるしにうくしかけ侍らぬ世のまゝにうくてこそ
里侍りなん。かれ。はせにむつましうつうまつりを
きしまるしのをのづから侍りなるとうれしくもか

しくもしひこまへしられ侍る。こころうな命のかど
まで。うくさ海ぐれるすを見まへすぐし。しる給へしり
侍るなん。いとしづらしうこころうくなん侍る。宮(白)より
を時ぐいまいりて見まれ。おぼつかなくこえもこりえ
てぬるいこよなうおもひへだてなるなりなど。
の給はするおりく侍れど。ゆゑし知分までなん。恒
えぐ佛よりかくはみこそまつらまほしき人を
なくなりまて侍るなどそこゆ。故姫(大)君のはことぐも。
えこつなもせば。そし比のはありさ海などうこりて。
なまれおりなまとの給し。それもみぢれいろとみ
てを。えるなくよえ給はるうこがこりなどと。はき

てを。たゞなくよそ語ゆうこがこゝりなどと。はき
なりらぞうちわるゝきたれど。うゝ家はうあり
うことずくなる御抽ゝ。おしゝりゆゝ人の御さて
ろぞへゝれとのゝ。いとゞまてそへ語。実の御中こそ
今すこしいまめしれ抽ゝ。心ゆゝ御ぐらん人乃
こゝめはたしこなくもてなし語つ面くこそもれ
し語めゝを。我はまいとんふくなさけくしと
いゝんこて。いでゐしてんとこそ思ひなへ思など
心のうちにおもひくらべ語。さて抽のつゐでにゝれゝ
こ思ひ(うさ思ひ)れるをといひいでなへり。京(弁行)にこの比侍らん
とハえ思り侍らば。人づてにうけ語ゆりしるのす
ぢなくなり。故(八)実のまゝこゝ御山ずこも思なりず。故

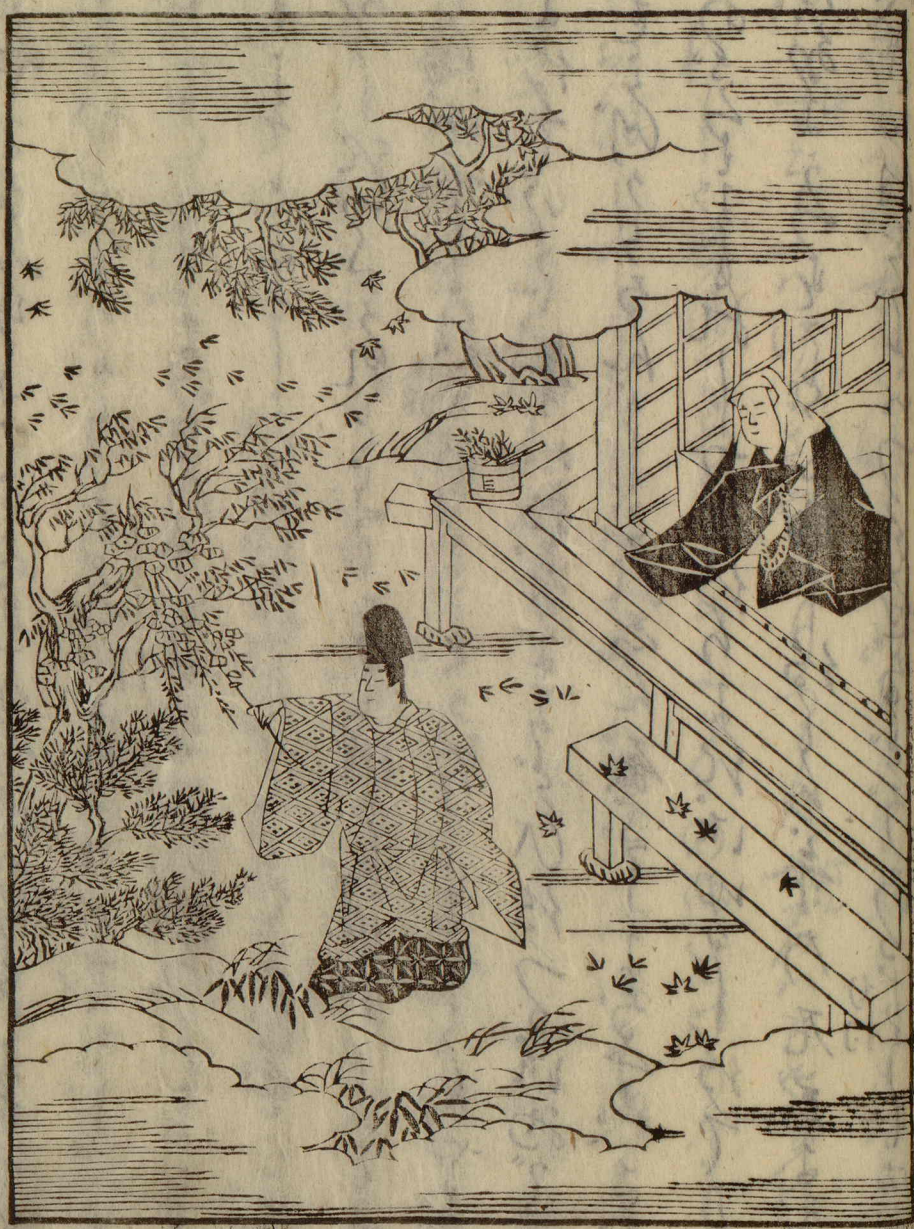
山のうさうせぬへりなるかどちかりなるところ。中将の（うさ・母ノ母）
君とてさふらひなる。上らうのんぞせなどをなし
うは侍らざりなるをいと志のびて。そうなる程は
他の給はせなほと志る人も侍らざりなるは。女は子
となんうえて侍なるを。さもやあらむとおぼしそ（ハん）
とれありなるからは。何いなくわづらひしうもれし
きやうはおぼしなりて。まことを此らんじいて
ことを侍らざりなり。おいなくそれことはおぼし
こまて。やがておほかたひじ里になるを給ひは
けるを。たしこなるくおもひて。えさふらいぞなるに（中将君ん）
なほが。見られくのうえれめはなりてくぶりなほが。
ひとくせのがりて。それ君たいらうは他し給よし。

ひとくせのがりて、それ君たいらうは抱し給よし。
此わたりはもかのめしやうりなるを、八きたしめし
つけて、さらまうらはせうそこあるべきことまをあ
らずとの給はせはるちられば、中将君ひなくてなんな
げき給りなる。さてまたひたちはなりてくぶち
給りはなるが、此とし比なとにもきこえ給はざりつ
るが、此長のがりて、かれ白家はたづひまいりたり
なるとなんかのきく給し、かれ君のとしはたちち
ぞうはなり給ぬらんかし。いとおしげはおひいで
給ふが、かるし八と大との記後ノ事記ことなどにて、中ごろは文はさへか
きつぐけてなんはべめりしと罪ゆ、美んくりしう

きゝあきらめなて。ぢらが海ことまてもあらんか
し。みぐやとおりふしいできぬ。むすしの(詞)はけいひは
うけてもふれさらむ人は。志らぬくまでもうづ。
志らまほしきこゝちれあるを。うぢまへおりぬざる
なれど。志ふまなぢうき人にてそはあるれ。わざと
はなくとも。はわたりまをとなふおりはらむつゐで
は。かくなんいひしとつゝへ給へるどだちの給ひ
とく。母君は故(弁詞 淳和母)ハ(ハ)ふるの御めいなり。弁をとるれぬ
なりらひは給べきを。ちれうえはかくは給りて。
くりしうも見給へるれざりは。さいつころ京より
たいふがもとよりやしうりしは。うれ(淳和)志なんいうで

うれはもうまぶまいらむとの給なり。ちうんを
よるど侍しかど。まぶこゝにさしもへてはをと
るわず侍めり。今さらばさやうれつゐでよ。かゝ御
おほをぶするどつゝへ侍らんときこゆ。あけぬ
まばかへまゐりんとて。よべなくれてもてまいま
御。きぬわゝるどやうれ抱。おぶりまをくらせ給ふ。
あま君よもゐふ。法師がらあさぶ君れげまどもの
まうまとて。布るどいふものをさへめしてこぶ。心
がそきまゐまゐるれど。かゝ御はとふらひこゆさ
ざりくれば。男れかどまハいとめやすくしめやうまてな
むをとるひくろ。ニおぶらしれこへがこれまで吹とを

したるに。踏る木ぞ心をなくちり志きたるもみ
ぢを。ふこかゝ海あとを見しぬをこわしてとゝんに
をえいで給ひず。いと気色ある深山木にやとりしる
つゝれ色ごまごのこりしる。こゝになどすこしひき
とゝを給て。家へ中とおぼしくてもこせ給
黒屋どり木とおもひいでずはこれもとの旅の日も
いとさびしからましとひとりごち給をきて。あ
まぎる
弁あれもつるくち木れもとをやどりきとおもひを
きゝかどれかなしさ。詞くまでふるめきこれど。ゆへ
なくはあらぬとぞ。いさゝかれなぐ海あにはおぼされなる



中 こゝやまも 芸ノ みぢかくてまつ里あるへれば おとこ 白 家おりし
ますかどなりかり こゝろみれ家よりとてあるにころ
をなくもてまいりたるを 中 女君例のむつかしきこと
もしそとくるしくおがせど とりかくさむやハこゝや 白詞
おりしれつゝかれと ふぐなるらばの給てめしよとて
こゝ給 此ゆゑには 文詞 日比なるにとかおりしますらん やま堂
に給て いとゞ峯の釣雪にまどひ給つる 此物がたり
をこゝ所からなん かしこの志ん殿 ぶうにちすべきなり
あぐるまもれしつを給りに 此ゆるし給てこそ
ハ 御ようつをことも物し給らめ 弁乃尼君にさる
べきおほをごといつるせなどぞある 白詞 よろしも 此里

うきゐへはゆゑうれ。まろありとぞきゝつゝんとの
給も。すゑしはげにさやなりつゝん。女君(中ん)はことなれを
うれしと思給に。あるがちにかくの給をゆりなし
とおぼして。うちゑんじてゐ給へはれさ海。よろ
げのつゝもゆるし川べくおし。遊(句讨)るすゝい給へ。え
じやとてかゝざ海にそむき給へり。河(中ん)まへてかく
ざしむをあやしけ事は。山里(文讨)のはありきのうら
やましくも給れ。うしこはげにさやうにてこう
らくと思給へしを。ことはらに又以はかれ中を
とめんらりは。あらしもつまじう思給をいら
にをさはべきさ海になさせ給らじ。とろかなるべ

なんときこえ給。うつくきかし。紅もなき御
しつびなめりと見給ひながら。ウ(句)がはこころな
らひに。ふぐなるじとおぼすがやまらぬなるべ
し。かれぐなる前栽(せんざい)の中に。おぐれのもれより
ことに。ゑをさし出てまゐくがおしうこゆるに。
まるかに出さしこゝろを。露をつゝぬきとむる
むれを。たゞなげにうちなびきなど。例のこと
なれど。夕風な線あかれなりし
　ウ(句)にいでぬもれおもふらしたのずくきま
ねくたもとの露をけくして。なつ(句)かしたかどれは
ぞどもに。なとしどりき給て。琵琶をひきの給
へり。ウうしきでうれかきあらせをいとにくれに

ぞどもはなとしどりき給て琵琶をひきの給
へり。けうしきでうれかきあるせといとゆゑれは
ひきなしぬへば。女(中)君もこゝろはいりぬへからしと
まて。をのゑんじもえしえて給ぞ。ちいちされ
木丁れつまより。けうそくはよりかゝりて。かのかは
さしいでぬへは。いとゝ海かしくらうしげなり
秋(中)えつゝのべれそしきもしのぞくきかのめく
風はつけてしうしれ。月が身ひとりのとて漁ぐ海
海しが。さすがはえづしそれがあふぎとまざらえ
しておかすゝ。うろれうちのらうしくをしえ
らはきどかゝ(匂ん)はしそ人もえおもひえなるざ
らめとうしさがりしきがたゞなるで。うらめしれ

なめり。菊のまぎよくもうつろひそぐ。けざとつく
ろひこそさせなへるを。中々をそきは。いつるるひ
ともとよりあらん。いと尺所をそうつろひこるを
とりけきておらをなて。花の中よひとへまとずじ
給て。なまがしのみこの。これ花めでこるなぞかしい
ましへ天人のかけアて。びそのまとしへなるハなり
ごとをあさくなりまたる世ハ抱うしやとて。はこと
さしをさき給を。くちおしとおぼして。ふしそあさく
をあらめ。じかしをつくへこゝらんことさへハなどてか
さしもとて。おぼつかなきてなどをゆかしげり
おぼいたれば。さらばひとりごとハさうぐしきは。

かばいられば。さらば（句讀）ひとりごとはさうぐしきま。

さしいらへ志まへりしとて。人めして御うの御琴
とりよをけをて。ひかをこそまつりたまへど。昔こ（中讀）
そまねぶ人（ハ）抱し給しど。たゞぐ志うきくをと
めぞちりまし抱をとて。つましげにそもふき
給はねば。かぞ（句讀）かれるまも。面ぐて給へ所ようころ
うかれ。この比ろあたりは。まぐいとんとくべきなど
まもあらねど。かたちなりなうぬことをもかくさず
よそ何れ。まべて女はやいろかり。こころうつくしれ
ちんよきことしよう。それ中（蓋）納云もさぐひめり
しがかれ（蓋）志まえた。かうもつくに給りじ。こよなき
御中なめれば。ちなど。まめやかにうらみられてぞ。

中うちなげきてすてしまうへぬふ。ゆるびたりそれ
ぞ。がんしきでうはあるを給。うきあるせなど法
まをと。おしうきて西。いせ(勾)のうしうしひ給ふ法
しきのあてはおしきを。女ぞられものくうしろ
はちづきまいりて。しきひろごりてぬるり。ふる(勾ノ)
ごろ(内ノ女ぞと訪)れてしますそつけ也ど。それもことわり
なれば。粗ひがおまへとばさいたいべとうり。さ先。
かしあ法ありさ海はまじらひ給べくもなりぎりし
そしごろれ法しまぬを。まさくりる海なりしげは
おぼして。の給はすることいとこころうけれなどれ
ぶいひはいへば。ひろ君人ごは。なるる海やとせいす。法

ごとくもそしへそまつりなどしつく。三四日ニ一ツを
里かたして。法拙いみなどことつけ給をうれ殿
まれ。うらめしくおぼして。おとゞうちより出給け
海まくに。こゝに海のりうまへれば。家ことくしげ
なるさ海して。なましにいましつるぞとよと。むつ
かりぬへど。おなしにわたり給て。たいめし給。以羽と
なるすなるいなどは。この院とこたまへで。久しう
なり侍りを。衣にこうなど。昔の法拙謂などすと
しきこと給て。やがてひきつれきこしめて出
給ぬ。法こども。れ殿がらさらぬ上達ア殿上人なども。
いとおほくひきつゞき給へ。法いきなひこちこれ

をうつ（ゆノ女ごとん）に。ぶべくもあらぬぞくしいこがりかゝ。人
ごのぞきて見まりて。さもきたらにおかしけれ
そごかな。さばかりいづれともなく。ひうさりまて。
きよげにおかしすれにごもれ。まゐべきもなかり
りり。おなめでこやといふもはり。又さがかりやん
ごとなげなるはさ海まて。ひざとはひゝへにまいり
こまへ海こそにくけ是。やそげなれ世やなどう
ちなげくをあるべし。はゆ（ゆん）身づからもきしうこと忠
出るよりそじめ。かれ花やかなるはなからひに。こち海
じゆべくもあらぜ。かすかなる身のおぼしをと。いよ
いよがうかれど。なを心やまくこもりゐなんの

ことぐもそしへそてまつりなどしつく。三四日こを
里おろして。法拙いみなどことつけ給をうれ殿
まれ。うらめしくおぼして。おとゞうちより出給け
海まくに。こゝに海のりこまへれば。家ことくしげ
なる海して。なましにいましつるぞとよと。むつ
かりぬへど。おなさにわたり給て。たいめし給。又詞
なるすなるいなどは。この院とこたまへで。久しう
なり侍りを。衣にようなど。昔の法拙遊などすこ
しきこし給て。やがてひきつれきこえぬて出
給ぬ。法こども此殿がらさらぬ上達ア殿上人なども。
いとおほくひきつゞき給へ。法いきなひこちこれ

をとうに（伴ノ女どもん）ゐるふぶべくもあらぬぞくしいたがりける人
ぶのぞきて見なりて、さもきたらにおかしけれ
もじかな、さばかりいづれともなく、けうさりにて、
きよげにおかしするはしどもれ、まのべきもなかり
かり、おちゐめでこやといふもなり、又さがかりやん
ごとなげなるはさ海にて、けざとはひんにまいり
こまへ海こそにくけ道、やせげるれ世やるどう
ちちげくをあるべし、はゆ（伴ん）方づからも、きしかたと思
出るよりもじめ、かれ花やかなるはなからひに、こち海
じ海べくもあらぜ、かすかなる方のおぼしをと、いよ
いよんがうかれで、なと心やせくこもりぬなんのこ

いよいがうかれど、なと心やすくこもりぬなんのこ

こそめやすからめなどいとゞ見て給ふ。そうなくて
としも黄(黒廿三ヶ)ぬ。七月のつごもりがたより、れ(中)いならぬ
ぬさ海になりやこのを、家(白)まぐ出らんじならいぬ
るまて、いかならむとおぼしなげきて、こゝぞ思う
など、前々まであまりさをさせ給。又こゝちじめそへ
させ給。いといたうわづらひのへば、姫(ささい)のこや(ぬ名中文)よりを
出とふらひありかくて云とせになりぬれど、一所
の出ぶざしこそをろかならね、大かたの世にはもれ
くしうをもてなしきこえし給はざりつるを、この
おりぞいづこにもくきこしめしおどろきて、
出とふらひどもきこえ給ふ。中(黒ぶ)納言の君は、家(白)の

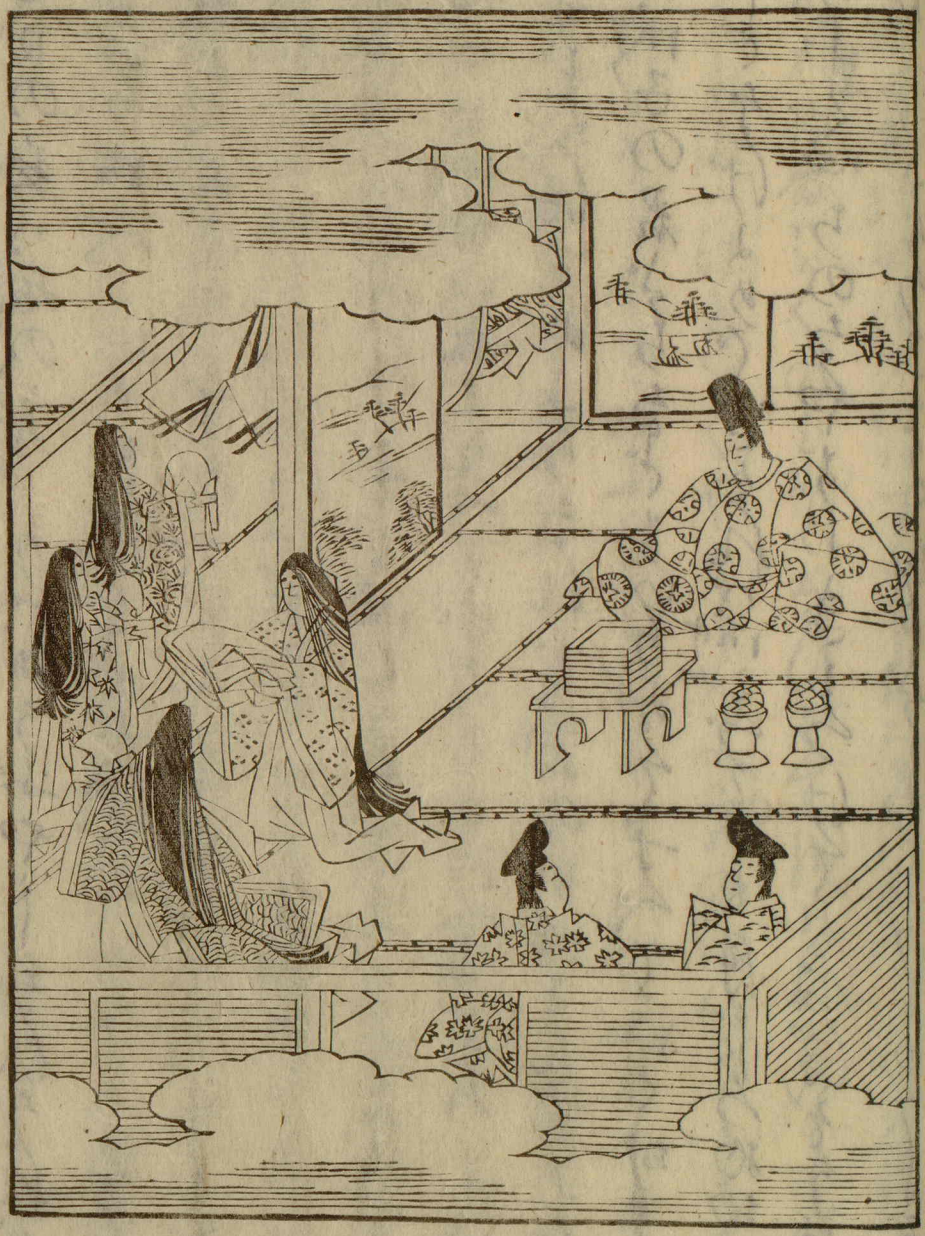
おぼしさらぐらんまもととらず。いつまおりとんとな
げきて。こころぐるしくうしろめたくおぼさるれど。
かざりにのるはとふらひだりこそあれ。なまりもえ
まうで給はず。思びてぞはいのりなどもをさせぬ
なる。さはは女二のまゐれはもぞ。ただこれ比になりて。
世中ひじきいとなるのくしる。よろ所のるす。今上みど
乃はこころひとつなるやうにおぼしいそげぞ。御
うしろみなさしをぞ。中ゝめでたげに見てはる。
女二ノ母
女はのしをさき給へはるすどもはさる物にて。はくを
どころさるべきずるやうどもなど。とりぐにつ
かうまつるすどをいとかざりなし。やがてそれ

かどにまいり（蒙）そめ給べきやうにありければ、おとこ（蒙）
がこもんづかひし給ころなれど、例のことなれば、
そなたばまにいんをいらで、これはことのこいとに（蒙）
しうおぼしなげる。二月のついたちごろになを
しめとういふことに、權大納言になりて、右大将かけ（蒙）
給ひ、右のおほい殿左にておはしけるが、志くなへ給
ところなりけり。よろこびに所ぐありさ給て、此文（白）
にもまいりなへり。いとくるしうしなへば、こなたに（中ノ）
おはしますかどなりければ、やがてまいり給へり。僧
などさふらひて、いとびんなきなりこととおどろき（白ノ）
給て、おぎやかなるはなるとし、はしこがきねなどな

ヨ。ひきつくろひておりて。こうの（啓）もいし（拝）給。はありさ
海どもとりぐにめでたし。やがてこよひつうさの人に
ろく給。あるじ（薫）の所にと。さうじ（白と）なり給。となりやうに給
人（中）によりてぞおぼしたゆたひなめ海。左のおほ（夕）い
殿のきたまひなりまゝにとて。六条院にてなんを
ゆ海。忘むがれみこたち。上ぞ。アだ。饗（きやう）にとらんぞ。
あまりさはがしきまでなんつどひ給なる。これ京（白）
もいたり給て。きづんなければ。まぐこともてぬに。いそ
ぎうへり給へ海を。おほ（夕）い殿の所なるにはいとあり
がめざ海しうとの給。とと（地）海べうしもあらぬ所ぞ
なりと。たゞい海のおぼえのたるやうさに。おぼし
とりてぞしたちもてなしなへ海なめりし。

なりと。ただいま海のおぼえのとるやうさまおぼし
とゞりてをしこちもてなしぬへ御なめりかし。
中ちうしてそれ暁に。おとこまてひまれ給へ御
と。家旬もいとうひあるさ海まてうれしくおぼし
たり。犬(薫)ほどのもよろこびまろへてうれしくおぼす。
旬よべおいしましたりしかしこまりに。やがてこれ
はよろこびをうちそへて。こちなどまいり給へり。
くこもりおいしませばまいり給いぬ人なし。はう
ぶやしなひ。三日は例のたゞ家旬のはけこそしご
とまて。又日の夜。犬(薫)殿より。どんぢき五十具。碁(ご)
てれぜに。けうぞんなどは。よれつねのやうまて。こ(中)も
ちのおまへ乃つかがさ。三十。ちごのはぞいつへがさね

まて。はひつきなどぞことくしからば。しのびやう
にしなし給へれど。こ海かまられば。いとわざとめな
進ぬ心ぞへまぞ見えける。家(匂)れおまへまも。どんかう
のおしき十二して。ふうつきどもまて。ふずく
まいらをなへり。女房のおまへまは。ついがさ日をぞ
さ海もれまて。ひまりご三十。さ海ぐしつくしらう
ことどもあり。ひとめまもとくしくハ。ことさらしな
しこまいず



七日の夜は、居(きゆい)の家(略中家)よりれ法うぶやしなひなれど、
まいり給人ごいとおほかり。家の大まをたじ絶て、
殿上人上達ゆかずしらぜまいりなへり。今上うちまを
きこしめして、家(旬)のいじめておとなび給なりまは、
いそぐかはとの給をせて、法もうしこそまつれ給へり。
九日もおかい(タ)殿よりつうまつらを給へり。よろしか
らぜおぼすあこりなれど、家(旬)のおぼさん所あれ
は、法子(タノ)の君ごちなどまいりなて、すべていとおもふ
ことなげよめでこかれば、法(中山)こづからも月ごろ物おも
いしく心ちのなやましきまつけても、心ぼそうた
がしけうりつるまうくおもぞしういまめうしき

ことどをれおほかれば、すこしはなぐさみもやしぬらん。大(芸)将殿はかくのこおとなびとて給めれば、いとゞ我かさざ海はけどをくやなるらん。又(旬)家のはんざしも、えをろかなるじとしふはくちおしかれど、又ちじ兎よりのんをみてをおもふまは、いとうれしうもあり。かくてそれ月廿日あまりのかどまぞ、藤つぼの(女三)家乃はもぎのことありて、まこの日なん大(芸)将まい里給ける。それ夜のことはしのびこうさ海なり。あめのしたひじこさて、いつくしくみしつるはかしづきま。こゝ人のぐしこそまつり給ぞ。猶ありずこゝろぐ海しくこゆる。さ海はゆるしはありなぐらも。たゞいまかく

しをいそがせ給まじこさことぞうしと。そうしら
ハしげにおもひの給ふ人どありけれど。おぼしたち
ぬることすくしうおりしまれ法んにて。そうしか
されたりしなさまでおなじくハもてなさんと
おぼしなさつるなめり。みどの法むをめえ給へる
人ハむかしも今もおほかれど。かくさりの法世にも
たゞ人のやうにむこごりいうがを給へ法こづひ。
まくなくやありけん。左のおとじをめづらしうつ
かう人の法おぼしまくせなり。故院ごろ。朱雀院の法
まゑにならせなて。いまハとやつし給しこさいにそ
れもしみやとえてまつり給しが。つまとまいて

ひともゆるされぬ相を。ひろひ（後葉のす）たりしやとの給ひ
つれど。宗（後葉ん）ハげよとおぼせよそづしうて。はいしへ
もえしなハず。三日（女二 此祝云五て）の夜も大蔵ゆりたじめて。
されはうれんよせよなさせ給へば。人ぐけいし
よおぼせごとなて。志のびやかなれどかれはどん
ずいぢん。車ぞひ。さねりなどまで。ろくなる寸。
それかどのことハ。ひろしごとれやうよぞあり
なる。（慧）うくてのちハ志のびくよまいり給。心（慧ん）のうち
よはなをひきれがしきいよし（大くす）へざ海のしおぼし
て。ひるまはしとよおさかしなぐめくしてくる
是ハ心よりかりよいそぎまいり給もなるらハぬん

地はいと拙うくるしうて海(女三と三条家へ)でさせしてまつ
らんことをぞかぼしときてゐる。母家(女三ん)はいとう
れしきことにおぼして。(詞)おりします寝殿(しんでん)をさ
ましてゐたしなりぬべくの給へど。いとうたじけ(慧詞)
なくむとてはねんぞごろのあかひにらうとつゞ
かて。つくらを給ましおもてにうつろひ給べなるめ
ア。ひんがしの廊どもちどをやかてのち。うゐ
たしくはたらしくあら海かしきを。いよくみ
がきそへつゝ。こまゝにしつらはせぬふ。かゝ海はこゝろ
づひを。(今上)うちにもさこしめしてかどなくうちと
けうつろひ給りんを。いくゞとかぼしたり。(地)みかど

と罪ゆれど、心のやミハおなじことまなんおりしま
しかり。母宮(女三)の御もとまは(今上ノ)つかひありかり。御ふミま
をたゞ此御ことをのミなん罪しさせなへりかり。
右朱雀院のたりわきてこれあま宮の御ことをば
きこしとりを給しかば、かく世をそむき給へ是ど
おとろへぞ。なまごとももとのまゝに。(女三ノ)そうせさを
給ことなどハ。(今上ノ)かなしずこさこしめしいれ。御より
いかゝ罪なり。かくやむごとなきはこころぞをり
ことみまかぎりもなくもてかしづきさはがれ給。
おもぶてしさをいかなりまゝあらむ。(苦ノ)こころのうち
まハことまうれしくも見えしぼるをともすれどうち

なぐめつゝ。宇治の寺つくるすをぞいうがを給。家(白)
のわうぎこれいうまなり給日うぞへとりなて。それ
もちぬれいそぎをんにいれて。こ抱ひまりごなど
までこいれつゝ。世のつ○れなべてにはあらずと。れ
がしこころざしてぢん。志たん。志ろう○。こがねな
どみちくれさいくぞもいとおほくめしさふら
ふせなへば。われをとらじと。さ海ぐれことぐもを
志いぞめり。芳(慧)づらも。例(れい)の家(白)れおほしまさぬひ
まにおかしこう。心のなしにやあらん。い海すこし
をもくしくやむごとなげなるくしれさへそひに
こうと見ゆ。今(中ム)はさりともむつかしうらしすぐろが

とるどハおもひまぎれ給ふこゝろんと心やすくて
たいめしぬへり。されどありしちぎられ氣色り
まづ泪ぐゝて心にも詞ゝぬまじらひ。いとゞ忘ひの御
ゝなり抱まこそと世を忘ぬへゝぎ御ゝ事のゝちん
まさりまたりと。おいぶちなくぞうれへ給。いと中詞ある
御しきはことゝれ。人もこそをのづら御のかまを
もりきて侍れなどハのゝまへど。かばかりめでたげ
なりなどもまもなぐさ海ず。ワまれがゝうおぼし
給らんふかさよと。衣に忘さてて給ふ。をろかまを
あらず忘ひ志られ給。大おりをましかばとくちおしう
おもひ出きてしぬへど。それも我ワがありさ海のやうに。

うしやこなく力をうしむべからなるし。なるにことを
かぶるらでさせの人めしきこともあるまじから
なりとおぼゆるまぶ。いとゞかれうちさけもてゞ
やこなんと。ひかへりしはんをきてはなるとこと
まともくしうしいでられ給。[蓋ノ]ワ君をせちにゆし
がりきこゝ為まへば。[中心]をづかしかれど。何かは屈ぐそ
がれまもあらん。まりなきことひとりにつきて。うら
みらるしよりおよは。いでこの人乃はこころに為がは
じとおぼして。ふげからはともかくもいらへ。[蓋]なる給
をでめれたしてさしいでさせ為まへり。[蓋]はしなり
ことなれど。まくげならむやは。ゆしきまでもろく

ことなれど、おくげなるしやハゆしきまでしろく
うつくしうてうつやうな抱縫し、うちしこ給へ御か
目をうるは、ワがもれまてこまほしう、なくやまし
きも、世の抱しとなれがこくなりぬるまやあらん。
ちまでいふかひなくなり給ましひ大とのよれつ〇
の有さ海まて、かやうなるしんひとともとぶめをき給
へらましかばとのこおぼして、此比おもぶ女二ノ事しげなる
れあらりは、いつしかなどいしまらぬまそ、何まりす
べしかさ君のれんなめれ、くめくしうねぢけく。
まゐびなまてこそいとおしけれ、しろワろびうこは
なるしん人をこうど今上れそりワさせちよちうづけく。
むつび給べきまもあらじ抱を海とし給うこ

ざ海の山こころをよてなどこそはめやすくものし
給けめとぞとしたる海べき（芸ん）げまいとくおさなれ
ほどとゝんを給へるも義なれば是いよりは抽説など
こまやかにきこえし給かどは嘗ぬれば こころやすく
夜とぶまふくすまじきを くるしうおぼゆれば なし
げくく出給ぬ（中ノ内ノ女詞）おしのひとの山旬ひや おりつれ
ばたゞいふやうに 鶯をこづ口きぬべかめりなど
づゝいしがるまりき人もあり 夜（なつ）はなるしば 三条の
家ふるさがるこゝはなりぬべしとさだめて 四月
ついたちごろせちがんとていふるまぶしきさ
きはけたしなりぬ あまとての日 藤（女二）つぼ（今上）へ
けたうを給て 藤の花のえんをさせ給ふなれば

きよけうしなりぬ。あまとての日。藤つがいうへ

けうしを給て。藤の花のえんをさせ給ふるゝ此日

さしのこれあるべて。はいしこそこそ。おほやけけざ

まて。おほゆしの見やれつうまつりなまへあらず。

上達ア殿上人の飛食(さやう)なるど。くらづきよりつうま

つれり。左のおとゞ。按察(あぜつ)の大納言。藤中納言。左兵

衛督(かこ)。みこしたちハ。三の宮(白)。ひたち(白ノ本ニ)ハ宮なるどさふらひ

給ふるゝ此庵の前乃はれのもとに。殿上人の座(ざ)を

しきり。こうらうでんのひんがしまゞ。どころ此人を

めして。これゆくゆどに。そうでう吟て。うへの御前

そびに。宮(女二)の御かたより御ことどもふえなどいざ

させなへば。おとゞをもじめなりて。おまへにとりつ

つまいり給。故六條院の御手づからかきなりて、入道宮
にまゐらせ給しをうんのふ二巻。あえふの校につけるを
とおとゞとりなりてそうし給。つぎくにはさん。さう
の御ことびは、わごんなど。朱雀院の御どもなりけり。
笛ハかれ夏につゝへし。いましへれかたみのとまた
なきの物の音なりとめでさせなされば。これかりの
そうよりより。又はいつかはとへぐ志きつねでれあら
むとおぼして。とうで給へ御なめり。おとゞわご
ん。三宮琵琶。とりぐにはふ。大将の御笛ハ。ぞふぞ世
になきねのうぎりは吹きて給ひる。殿上人の中に
も。さうがにつきなるらぬどもはめし出つて。いとは
しろうあそぶ。宮の御かたより。ふぎくまいり給。

もしろうあそぶ。家(かこ)の作りたるより。ふぞくまいり給。
だんのかしき四(よつ)。志たんれたうつな。ふぢのむらごれ
うち志きまおりえざぬひたり。志ろ色のやうだ
面りの作さうづき。面いじ。いこん面りなり。兵清(ひげ志ノ息之)
作まうなひつかうまいり給。作さう月まいり給う。
おとじ(タ)志(今上ノ作盃を云之)きりてはびんなうべし。こやたちの作
中まなたさ法べきもおりをねば。大(薫)ねまゆげ生き
そし給を。(薫ノ)たじかり戸ぬへど。作(今上ノ)気色もいうじあり
けん。作(薫ノ)さうづき作ぞて。をしとの給へ法こは
づひもてなしさへ。例の大やけごとなれど。ひと
まくぞこゆりを。ふふいとじみなしさへそふまや

あらん。さし返しぬりて。かりてぶらうしたるへ
ぶかど。いとこぐひなし。ぶらうれみとこちたる
などの給ひりぬふぶよ。めでこそさるものを。これハ
ましてはむとまて。もてもやされてまへり給へ
ば。はおぼしをろかなるしばめづらしきよ。かざりはれば。
くぶりぬる度まへりつゝ給ひ。心ぐるしきまで
なんこそけり。おぼちれ（お掛たる人々）大納云ハ。我こそかゝ御めもと
むとしらしが。ねこのわざやとしひぬ給へり。これ
（かつぞ）こやのはたく女はとぞ。むかしこころかけきこしぬ
へりかはと。まいりぬてのちを。なをおもひたるれぬ
さ波にそうしかよいしなどし給て。ぞてまて（かつ）ゆかとえ

なんのころつきたりければ、ゆうしろのぞむ
かしきもらしゆけ道ど、そこ（今上ノ）しめしごまつる人
ぞなりはかれば、いとこころやましとおひて、人がらは
げにちぎりことなめれど、なぞ時のみかどのかく
おどろくしきまで、むこうしづきし給べきま
こあらじかし、こゝのへのうちにおはしまは殿ちう
き程まで、ふく人乃うちとけさふらひて、そてハ元（素）
んやなまやと、もてさはがるゝるすハなど、いらじう
そしまつぶやきゆけ道ど、さすがにゆしかれば、
まいりてころれうちまぞたちぶちの給かる、しそく
さして并どもなる、ぶんぶいのもとよりつく、そく

ほどのかしきはそのくしたりがほなりけれぜ
地 例乃いりまあやしげよかるめいたりけんとおもひ
や進バおるぶちまこるもしづねかぎかみのまち
を上らうとて此くちつきどもいことなるるまゝ
ざめれど志るしぶりとてひとりかたつぞとひき
きたりし。これハ蓋 志ねの君乃おりて此かぎしおり
てまいりぬへりかるとう
蓋 まべらぎのかぎしまおるとかぢの花をよばぬ
えぎに袖かけてぶり。地 うけぶりたるぞよくきや
今上 ふろげ世をかけてまほさん花なれバかふとも
ひかぬをとこそこれ。まさ為れとう

君がこめおれ家がぐしハしらさきれ雲より

をとらぬさるれなしさか

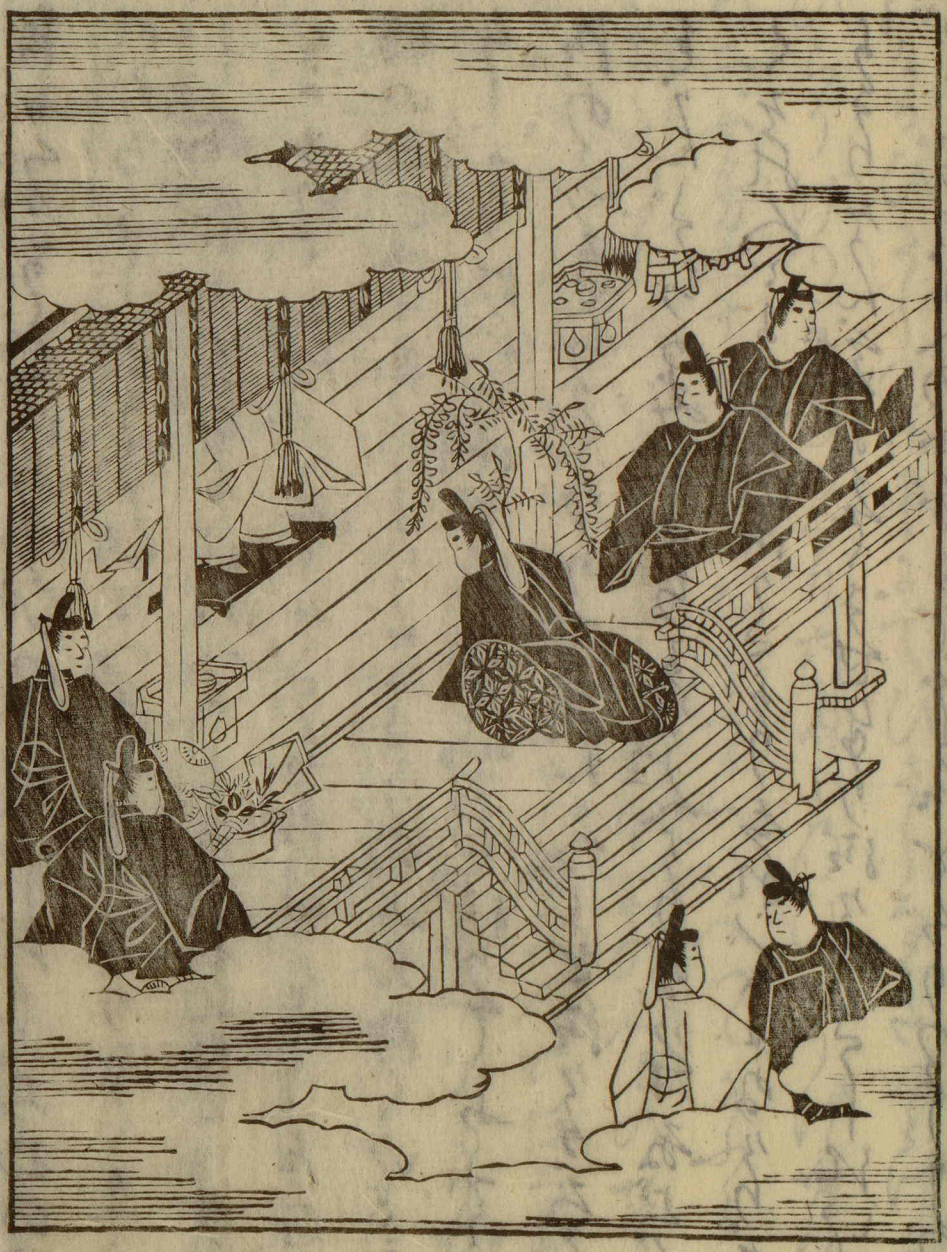
和梅 よれつ〇の色ともこうしず雲ぬまでこち乃

がりなる荷なこれりれ・これやこれいらぶろ・大和梅 納言れ

なるまなんとこそこゆれ・かたへハひがことまもやあり

なん・かやうにことなるおりしさかしをなくのこぞ

あるりし



我かつるまゝに、はあそびいとおもしろし。犬(黒)ねの黒
れ、あるしうとうしひなへ、はこゝ、かぎりなくめでゝ
し。按察(お拂あぜち)も昔まぐれ給へりし、はこゝのなぐりなれば
いまもいともれくしうて、うちあはせなへり。左の杞(タ)
は、いゝ殿の、は七郎、わらはまてさうのかえ、ぬくいとゝろ
ゝしかりければ、は(今上)ぞ給はす。おとゞ(タ)にしてぶらうし
給。あつきちくなりてなんへらを給はる。ろくど
を、かんぐちめ、みこたちまは、うへ(今上)よりなはす。殿上人が
くそれ人ごまは、宮(女二)の、はゝとより、しれぐまなはり。それ
よさりなん。宮(女二)まゝでさせなり給はる。ぞしれいとん
しとなり。うへの女房さなぐら、はとくりつゝうまつらを

給ふる。ひさしの御車にて。ひさしなるさいとげ三。
びらうげのこがひづくり六。あぐ乃びらうげ女。あし
ろ二。女房三十人。かしらハ志もづくへ八人でさふらぬ
に。まゐるむかへのいぐし車十二。本(ほんぞ)前の人(芸ノ方と云こ)ぐのせて
なんありける。御とくりの上ぞ了殿上人。六位なぞ
いふ。かぎりなうきよらをつくさせなへりけり。かく(芸ノ)
て心やすくうちとけてゐたり給ふ。いと(女二ノ)おかし
げにおはせ。さぐやかにあてにしめやかにて。こく
ハとこゆるところなくおかすれバ。すくせ(芸ん)の程ふち
おしからざりけりと。こころとどりとらぬ抱かる。
すぎ(大ノ事)にしかるのにすられバこうハあらめ。なをま

ぎゆくおりなく。拍のこゑしくおがゆれば。これ世
まてハなぐさめかゝ。つべきわざなめり。かとけま
ならてこそハ。あやしくつらかりけるちぎりの程を。
何のむくひとゆきらめて。おもひそれまめとおも
ひつゝ。寺のいそぎまのこゝろといれなへり。かもれ（四月ニ）
まつりなどさはがしきほどなして。廿よ日のかど
ま。例のうぢへおはしたり。つくらを給ふぐうみなて。
すべきことゞをとさての給などして。さてまいの
くち木（宇治くるへ弁ゝ所を云ふ）のりとをこ給ひすぎんがなる後あそれなれば。
そなるさぎ後まおりすなよ。女車（うき弁）れことくしたさ。
まゝハあらぬひとりあらましきあづまおとこの

まゝハあらぬひとけおらましきあつまおとこの

そしは柏かへるあまたぐして志もべうずおなく

これもしげるそしれてもしよりいまわたり

くなこゆ

ゐ中びこう抱かるとみ給つて。殿(芸)はまづいり給て。此
前どもなどはまづたちさかざこう程は。此車も
これ家をさしてくるなりかりとこゆ。此(こ)頃(ずいだん)男どを
がやぐといふを世(芸ノ)いし給て。なよ(詞)ぐとさかせ給
へば。こゑうちゆがこうものひこちのどんじ殿乃
姫君の。ふつをれ此寺にまうでくかへりぬへるなり。
ちじめもこゝにまちんやどり給へりしとゆに。おい(芸ハ)
や。さてし人なのしりとおぼし出て。人ごをばことか
こまかくし給て。ちや(芸ノ供人詞)此車いれよ。こゝにまちこひと
やどり給へど。ふおもてになんといふせ給。此(芸ノ)とを
の人もこゝかりぞぬすがこまてことくしから

ぬすびとどもなれど、なほけたひやしろうしむ。ロ
づらりしげにして、うなむしまどをひきさけなど
して、かしこまりつてぞとる。車（うきみ）ハいれて、らうれに
しのつまにぞよする。これしん殿ハまだあらハに
て、すぐれをかけぞ。おろしこめたる中の二まり。
あてへぐそたるさうじのあるよりの（慧）ぞ、き給ひ
ぞのなれど、ぬぎとさて、なとしさしぬさ乃
うぎりとさてがおハする。とうまもおりで。（弁）何ま
君にとうそこして、かくやんごとなげ成人のお
なすると、これがなどなるいするなるべし。（慧）君ハ車
とそれとさて給へ物より、ゆめそれひとにまろ

ありとの給ふとまゐくちがこめさせ給てげれば
こゝおさ心えてゝやおりさせ申まへまゐらうとハもれ
しこまへどことゝこまなんといえせたり。うきこ丹ノ供
人のあゝまゐおりでずゞれ車ノ打ぐめり。出前どもれ
さゝゐよりハこのおりとなれてめやすし。又おとなび
こゝ人いまひとりおりてゝやうといふまあやしく
うきこ丹詞
くあらハなるゝらしそすれといふこゝ。おのかなれ
どいとなてやうまゐ。例の供ことこゝるこハ出さ
供女詞
ざうさもおろしこめてのこゝそハ侍めれ。さてハ又
いづくのあらハなるべきぞと心をやりていふ。うきこ丹
しげまおるゝをこれバまづうしらつきやうだいな

ちやうまあてなる程ハいとよう思いでられぬべし。
あふぎとつとさしかくしたれバ。ほハうしぬ程こゝろ
もとなくて。むすめうちつぶせつゝ見給。車ハたかく
かるく所ハくぐりたるを。此人ゞハやせらうまおり
なしつるを。いとくるしげまやしんて。ひさしく
たりてぬぎりいる。こゝさうちきまなでしつとた
ぼしきかそなるが。ゆるなへいろめこうちきまたり。
四尺の屏風と。これさうじまそへてたるが。か
みよりこゆるあなたれバのこるべくもあらず。こなた
とばうしろめたげまたひてあなたざ海まむさて
ぞ。そひかしぬる。さもころぐるしげまおいしまし

つるかれ。いづこ河の氷ひてりも。まことまは。かハいとおろ
ろしうこそありつれ。この二月まハ水のすくなるし
かばよりつしなりけり。いでやありきハ。あづまぢを
おもへば。いづこかおそろしかしむなど。ふたりして
くるしともしひたしぐいひぬころま。志うれ（うき氷）をともせ
でひまふしたり。かひなをさしいでたるが。まろら
かまおしげなるかども。ひたち殿などいふべくをみ
えぐ。まことまあてなり。やうくこしいたきまで
たちすくみぬへど。人のけはひをじとてなをう
ごかでゐ給ま。ワさ（佐ノ女詞）人あなかうぢしやいうじき
かうれかこそすれ。あま（弁）君のたき給まやあらんと

いふを、いはひとりの女、げに何なめでこれ柏のや、
京人もなほいとこそこやびかに、いはめかしけれ、
天下(てんが)にいうじきるすとおぼしたりしぞ、あづま
にてかゝ御たきものゝかゝえありせ出ぬはざりきゝ
……これ尼君(あま)のそまぬはうくいとうすゝにおはすれ
ど、さうぞくのあらまほしう、まび色あを色といへ
ぜ、いとをさよらにぞあ御やなどかめぬたり、あな
これすのこよりいらはきて、御ゆなどまいらせ給
へとて、おしきどもとりつゞきてさしいる、くゞ
もれとりよせなどして、もれけ給ふ、これなどれ
こせどおどろかしがふたりして、くりなどやこの

ゆまや。おろくとくふも。きく（葉ノ）しらぬんちまはうこは
らいこくてしぎきなへど。又ゆしくなりつゝおを
こちよりくこ給ふ。これ（池）よりまさりきは此人ぐを。
きさいの家をもじめて。こゝうしこまてうこちよ
起も。心あてなりとも。こゝらあくまでこならしなゝ
べそれど。おぼろけならでは。めもんもとぐまら
ず。おまり人にもどゝ御くまでも此し給ふ法ん
ちに。こゝいまはなにぞりすぐれてこゆることを
なき人なれど。うくこちさりがこく。おなぐちり
ゆしきも。いとおやしき心なり。何（弁）ま君はこれ（葉）
の法うこにも法をうそこさこていぐしこりそれど

此心ちるやましとて。今の間どうちやすませのへら
なりと此とも此人ごころおもひていひうりされど。
ころ此君をおづねまほしげまおぼしの給ひしかば。
うらつゆでま。まみいひかれんとお目をまよらて。
目をくし給ふやとむそうくのぞみさ給らんとは
おもず。例のこころのあげらりども此まいれる。まさ
ごやおきやとごるてみもいれるを。あげまへども
まをくさせあどことどもとたのひかきさてうち
けきうじて通うとのうてまごさくら。おめつるさう
ぞく。げまいとうげらうて。こめ色ある後よしくし
くさるのげまぞおる。ふみのふおりしつぶあんとまち

きこしさせしを。などうちふも日こけていといふめれ
ば。此老べいとおやしうくるしげまのこをしたせ給つれ
ば。きのふはこのいづこ河のひろりまとゞまりて。けさも
むごまはんちこめらひてなどいふへておこをば。い
まぞおさぬらる。河(弁)ま君をもぢらひて。そだこゝろ
うこゝろめ。これ(蓋心)よりはいとよくこゆ。まことまいと
よしあるまゝ兄のわど。うんざしれひろり。かれ(大ノ子)をも
くりしくつくぐとしもみなはざりしはうはなれ
どこれ(うきふ)をこゝろまつそて。こゞそれとしひ出らるくま。
例の波おちぬ。おま(弁)君れいつへうちもろこゑけひ
乃かれなれど。家のはかこ(中)まもいとよくまころと

きこゆ。家ありなる人かれ。かくなるなるものを。いましで
こづねもしらでゐしなるよ。これよりくちおし
うらんきはれしるしらんゆりまてごよ。かぢうりよ
ひきてしらん人をこそはなるかまえおもふまじ
きんちするよ。ましてこれはしられこそまつらざり
なれど。歯ことはね家の法子にこそはありなれと
こゝろし。給てはかぢりなるうあもれにうれしくおぼし
給。こゞ今ももひよりて世中におかしなるものをと。
いひなぐさめまほし。おうらいまでこづほて。うんざ
し。れうぎりをつくへてこゝろなんみるどはなる後いと
いぶをうりなん。これはこと人なれどなぐさめ所あり

ぬべきさ海なりとおぼゆるは此人にちぎりおかし
なるにやあらん。尼君(あま)は抱かなりすうし志てとくいり
ぬ。人(弁ム)のとがめつるかほりとちくてのぞき給なめ
ことこころえてがれど。うちとけずもかくらいば
なりぬるかべし。日もくれもてゆけば。君(蓋)もやをら
出て。此ぞなどき給てぞ。れいめし出るさうじご
ちに。おまぎめし出ぬて。ありさ海などとひ給。おり(蓋詞)
志もうれしくまうできあひたるを。いるにぞかれ
罪しことはとのゆへは。志(弁詞)かおほをずす給し後は。さる
べきついで給らばとまち給しに。こぞはすぎて此
二月になん。ぞ川をまうでのこよりに多いめんし

て侍し。かれ（うきふ母ノ母之）えく君におぼしめしこゝろさ後ハ。かの
めかし侍しかば。いとうたいらいたく。かたじけなき
はよそへにころハ侍るなれとなん侍しかど。それこ（女二ノ事之）
ろかひハのどやかにもおりしまさずとうけ給し。
おりびんなくおもひおへつゝえてたゆん。かくなども
きこえさせ侍らざりしを。又これ度にもまうで
て。かふかへりこまへるなめり。りかへりれ中やどり
にハかうむつび侍るも。こゞ色にしはけハひをこゞ
ねなれしらるゝゆへになん侍める。かれ母君ハさえらこ
とまて。このこゞびハひとり抱し給めれバ。かくおえ
しますともなるにかハ抱し侍らんとこそゆ。（荒詞）お中び

ゑる人どもは、思ひやつれたるありきもえしと
て、くらがさめつれどいらじあらん。げそどもはかくれ
あらじかし。さていらじすべき。ひとり拙し給らん
こそ中々こころやすかなれ。かく整りふくてなん。
まいりきあひたるとつゝへ給へかしとの給へば、うち 弁詞
つけにいつのほどなる。はちきりまうけとうちわら
ひて。さらばしるつゝへ給らんとていらは
黄 八月 蒼れし息もきてしまかよふやとしげ
しをわをてかふぞこづぬる。こゝはずきこのやう
まの給をいりてかたりきこてかり。

69038
6AP78